

東方の世界に平和の狐を！！

RUZE@Re_SE—SEN_eR

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は狐である。

少年は妖怪である。

少年は…始神核である。

故に、少年は、絶対的強者である

目次

始まり

第一話 「こんな、ことってあり!」	1
第二話 「羽島、魔法使ってみた!」	4
第三話 「羽島の正体とは妖怪? 神?」	7
第四話 「全てを捨てる方程式」	9

都市防衛戦

第五話 「神になってすることは?」	12
第六話 「羽島が正体を明かすそうですよ!」	15
第七話 「羽島が可愛い少女と会うそうです!」	18
第八話 「羽島に恋い焦がれる姫様がいるらしいです?」	21
特別回 「聖夜の晩餐会!」	24
第九話 「羽島と月の移住計画!」①	29
第十話 「羽島と月の移住計画!」②	31
第十一話 「羽島と月の移住計画!」③	34
第十二話 「羽島君が妖怪の群れの主と戦うらしいです!」	37
第十三話 「羽島がどうやら決着をつけるらしいです!」	40

旅へと

第十四話 「羽島が自分の能力を発見するそうです!」	43
特別回 「二人の年明けどんちゃん騒ぎ!」	45
第十五話 「羽島の一人旅が始まるらしいのだが…」	49
第十六話 「羽島が自分の能力を使うそうです!」	52
第十七話 「羽島のチート能力とは一体…」	54
第十八話 「羽島と従者の…ふあ!?!な状況について」	57

諏訪大戦の予兆

第十九話 「羽島が幼女？に会いに行くらしいですよ」 —— 59
第二十話 「羽島が可愛い幼女？（神）と戦うらしいのだが…」

62
第二十一話 「羽島と諏訪子と参拝客と…」 —— 65

67
第二十二話 「気絶なうの少女は目を覚ますそうなのだが…」

第二十三話 「羽島と招待状と…」 —— 70

第二十四話 「羽島と決戦前夜」 —— 73

第二十五話 「羽島の秘策」 —— 76

第二十六話 「羽島と神奈子の一騎打!？」 —— 79

第二十七話 「羽島と諏訪大戦の終結と…」 —— 81

第二十八話 「羽島と彩花と新たな従者？」 —— 84

第二十九話 「羽島と彩花と…その他と…」 —— 86

第三十話 「新しい従者の名前が決まったみたいです」 —— 88

キャラ紹介 —— 91

第三十一話 「羽島が不死の山目指すそうなの…」 —— 93

第三十二話 「羽島と一緒に紫が旅をするそうです…?」 —— 96

第三十三話 「羽島の旅は、いつのまにか新築の家を建てる事になっ
ていました。」 —— 98

第三十四話 「羽島の家はいつの間にか豪邸へと…」 —— 100

第三十五話 「羽島はこれからみんなの修行の師匠（せんせい）です」 —— 102

第三十六話 「羽島はどうやらイベントに巻き込まれるそうです」

104

第三十七話 「羽島はまた、小さな女の子を保護したようです。」

第三十八話 「師匠と弟子と…」

第三十九話 「羽島は新たな旅にでるような？」

第四十話 「羽島の旅事情はいつも騒がしい？」

109

111

113

始まり

第一話 「こんな、ことってあり!？」

それは、突然の出来事だった。

急に何なのだが。僕の名前は「冬菜月 羽島」（とうなづき はしま）」

すまない。余談が入ったな。話を戻そう。

正直、今置かれている僕の状況がわからなかった…

いやさ…だって、僕はたった今さつきまで、高校から自宅まで人通りの多い商店街を通り下校している途中だったんだよ…

それが、!

「何でッ！僕は森の中を歩いてるんだよおッ！」

森の中に響き渡る僕の声。近くにいたのか鳥のようなものが驚き飛び立つ姿が見れた。

僕以外何かいたのかい！まったく驚かせるなよ!

まあ、作者曰く。驚かせたのはてめえだよ!!

「はああつくしゅ!誰か僕のうわきでもしてるのか?」

なんだこの察しのいい主人公は。

まあ、それは置いといて。話に戻ろうか。

それで、僕は一体全体どうしてここにいるんだ?

悩めば悩むほどわからないな。

「なら…先に進むしかないよね!」

するとお尻のほうに何か当たったような感触がした。

ん?と思ってお尻のほうを見るや…、

「なあああんじゃあこれええッ!」

彼のお尻には狐の尻尾のようなものが二本生えていた。いや、そこにあつたのだ。

触ってみると触られた感触はある。つまり…あ、僕ついに人間卒業

…

はは…人生バッドエンド。んなことあって、たまるかあああ!

よく考えたら着てる服もそうだ。

下校途中だったということは制服のはずなんだが。

今着ている服は白い袴（はかま）だった。いやああ、日本の伝統の着物だあ！

「つて、なんだよこれはあー！」

ふざけるなよ！家に返せよ！

ああ、本当に僕の人生とうとう終焉を迎えましたね！はh…

てか、どうすればいいんだよ。これなんてタイトルのゲーム？

そして、羽島は少し落ち着きを取り戻し冷静に考える。

こんな時僕の知っている主人公なら、まずすべきことは状況整理だよな！うん！

最後の記憶は、高校から下校中であつた。のと。

んで今はあ！僕のお尻にはモフモフした尻尾があります！

そしてそしてえ、！今更だけど、頭には獣耳のようなものがあるね！

そんでそんでえ、？なぜか着ている服は白い袴あ！

つまり…

世に伝わる、妖怪的な存在？

て、ことは！

すると、羽島の中である妄想が始まった。

妖術とか魔法とか使えたりするのかな！

いやーそれなら、是非ツ！使ってみたいものだよ！

そして羽島は思った。

どうやって使うの？、と。

まあ、ここで主人公なら、こういう時には。

たしか、使いたい魔法とかを頭の中でイメージして使ってるんだっけか。

まずは…

自分が空を飛ぶところをつと…

飛べるわけがなかった。

「うん、知ってたし！ちよつとぐらい夢見てもいいよね？的な気分で

見てました！」

はあ、僕って悲しいな。

自分の見慣れぬ耳や尻尾を触りながら羽島は一人森の中を歩くのだった。

第二話 「羽島、魔法使ってみた！」

羽島は今、湖の前でただ呆然と立ち尽くしている。

そこには、自分の今の状況を理解したくても理解したくない自分がいたのだ。

これの訳はというと。

—つい20分前のこと。

羽島は、只、闇雲に森を歩いていた。

「この森広いなあ…」

とはいえ、羽島はかれこれ3時間歩いているのだが一向に森を抜け出せる気配がないのだ。

すると。羽島は足を止めた。

「水の音がする」

羽島の耳が獣耳に変化したことによって、より遠くのもの音がよく聞き取れるようになっていた。

「水の音だああ！やっ！とこの森を抜け出せる！」

そんな期待にあおられながらも、ただ一心に音のするほうへ向かい走った。

200メートルぐらいだろうか。それくらいの距離を走ったところに水のおいがしてきた。

羽島の鼻はどうやら、この世界にきてからは良いらしい。

まあ、本人は鼻のことなどは気にしてはいないが。

さらに、100メートルを走り切ったところで大きな、湖が見えてきた。

だが、残念なこと…

「森の中かよおお!!!」

そう、森の中からは抜け出せていない。

だが、三時間も歩いたうえ、300メートルを走っていた間は何も飲み食いはもちろんしていない訳で、水が飲めるといっただけでも。どれだけうれしいことか。

「水でも飲んで休むかな。」

そう、この時だった。

水を口に含み、湖が羽島の顔を映しだしたその時。

羽島は、盛大な、それも虹ができるほど綺麗な水しぶきを上げて絶叫していた。

—そして、現在に至る。

「何で、僕の顔があー！こんなに可愛い女の子、みたいな顔になってるのおお！」

羽島の顔は、人間の時の羽島の顔とは全く違うよく整った綺麗な、しかも、女の子のような可愛い顔になっていた。

特に、人間の時の顔がダメだったということではないのだが。むしろ、普通。それが、可愛い女の子みたいな顔をしていたら誰もが驚くことであろう。

だが、羽島はすぐに落ち着きを取り戻した。まあ、さすがに容姿も変わっていてなおかつ、妖怪ときて、これだ。

もはや、驚くのものにも飽きが来たのだろう。

すぐさま冷静になり。あることに気が付く。

「もしかしたら」

そう、羽島の言う「もしかしたら」は魔法などが使える、という考えが正しいのではないかということである。

最初のことを思い出しつつ。改めて今の自分の容姿を頭の中の古い自分と置き換え空を飛ぶことを想像した。

すると、案外単純なものだったらしく。

気づけば宙に浮いていた。

「おお！飛んだ！」

羽島は飛んだというが、まだ、浮いているという表現のほうが正しいのだろう。

ただ、そこまでの過程は簡単そうだが…

「おおっとー！おおっあぁっ」とー！

ややぐらつきがみられる。

制御のほうはどうやら難しいらしい。

これを使いこなすためだけに、羽島は5時間ずーっと練習し続け

た。

―結果。

「よっしゃ！成功だあ！」

768回という挑戦の中で767回、制御することに失敗している羽島の顔はもう、偉大な何かを成し遂げたかのような顔をしていた。

どうやら、魔法の基本的な概念は自分の想像力にかかっているらしい。

そんなこんなで、夜の暗闇をしのぐための「ライト」を習得した。

第三話 「羽島の正体とは妖怪？神？」

空を自由に飛べるようになってから羽島は、魔法に関する学問〈魔法学〉について独学で学び始めた。とはいってももの。ひたすら頭の中で思い描いたことを実験するだけなのだが。

そこで、一つ分かったことは。力、すなわち。【魔力】・【霊力】・【妖力】の三種類の力がこの世界には存在するということ。

魔力は空気中に漂う未知のエネルギーを圧縮し体内に取り込み消費する。

霊力は人間が持つ魔力の下位互換といったところだ。下位互換である理由としては、一度霊力を消費すると体内で生成されるのに時間がかかるということだった。

この問題は、妖力にも関係することであった。妖力は妖怪特有の魔力の下位互換でありこれも体内で生成され、生成時間には霊力並みに時間を有するという結果だ。

なぜこのような考えができたかという点。これは、一種の個人が持てる特殊能力というものなのかもしれない。

—原因は突然だった。

「今日も野宿かあ…結局、空を飛んで上からこの地形を見渡すが何処も森、木、森、木い」

倉庫の世界には、人がいないのだ。

すると、ずっと上に飛んでいくと驚くことが分かった。

僕は、高校の世界史の授業で教科書に人が生息する前の古い日本列島の地図がリアルに再現されてある図を見たことがある。

目の前にあるのがそのまさかの。日本列島だ。

「これは、！」

その瞬間、一瞬、羽島に強烈な頭痛が走った。

「あゝあぁうゝう。！」

痛みがさっと消えてゆき、目を開けた次の瞬間。

左の眼だけが。すべての力の流れを読めるようになっていた。

「な、…い」

驚くことがあった、空気中にある青い光が自分の中に入り込んでいたのである。入り込んでいたというよりは羽島が吸収している、のかもしれない。

ただ、その光は飛行魔法を解くと吸収されなくなった。

次に、羽島を驚かせたのは。体に二色（白、緑）の線が流れていたことだ。

腕から心臓へ、そして足へとまるで血のように体内で流れていた。

この後に分かったのだが、霊力、妖力、魔力は互いに干渉する力が違うらしい。

そこで、羽島は生物の観察及び検証を行いそれをもとに実験を始めた。

これから、人種になるであろう猿のような生き物には、白い光が。

これから、人ならざる者になるであろうものには、緑の光が流れていることが第一に分かったことだ。

ただ不思議なことに、何の力も持たない生物がいたが、これに関しては実験対象外とした。

—そして

羽島は、人種になるであろう者に流れる力を霊力。

人ならざる者になるであろう者に流れる力を妖力とした。

この研究をひたすら羽島は、7年続けて理解しその理を自らの知恵で定理づけたのである。

ただ、検証の過程において問題が発生した。

人ならざる者【生り物】の成長が人種よりも早いのだ。

と、なるとだ。強者が弱者を食らう、言わば弱肉強食の時代に突入するのである。

羽島はこれを阻止するべくある考えがあった。ただ、その考えが、この男「冬菜月 羽島」の全てを変えることに本人は気づいてはいない。

第四話 「全てを捨てる方程式」

「人間の成長が遅すぎるな…。」

そう、羽島が直面している問題とは、人間の成長よりも生り物の成長のほうが早く。このままでは、人類誕生が難しくなってきた。

幸い、生り物にはまだ知能がないのか集団で生息をしようとせずただ、同種族の中で争いが多い。

ただ、ここ数年で一番力をつけているのは間違いなく生り物である。

そこで、羽島はある術を作ることになった。

その名は【封忌：過剰進化】というものだ。

内容は、現状の個体を無理やり進化させるといったものだった。

一見、問題はなさそうに見えるが、これには大きな問題がある。

無理やり進化させるということは生態系そのものを破壊してしまう恐れがあるということだ。

生態系の進化には順序というものがある。その過程を魔力、妖力、霊力を使い無理やりすつ飛ばすのだから、その分生態系に負担はかかるのももちろん。

生態術式となると、自分の身に何かが起こるかもしれない、という問題だ。

羽島は悩んだ、本当に自分を犠牲覚悟ですることなのか？、と。

だが、答えは簡単だった羽島はこれから日本を作る祖先を見捨てるにあつては生涯の恥だと心の中に言い聞かせ。

「祖先を見捨てるか、…僕には一生無理な難題だな」

そうして羽島は、術を完成させることに没頭した。

そして、はや一年。

ようやくその日は来た。

「はあ…」

大きなため息を吐き覚悟を決める。

【封忌：過剰進化】対象を人種に固定！魔力充填完了、妖力充填完了、霊力充填完了。陣を展開！」

すると日本列島の中心の上空に大きな陣が展開された。
そして、

「起動！」

陣が太陽のように輝き出した。

すると、光は一瞬で日本を包み込む。

術の威力のせいか、突風が発生し羽島はそれに飲み込まれた。

羽島は突風に流されるのかで、意識が朦朧としてきた。

それは、当然と言ったら当然だろう。魔力はもちろん。妖力、靈力をすべて使い果たしたのだから。

—その日、人類が誕生した。

—誰かに体を揺さぶられてる？

目が覚めると羽島は謎の白い空間に立っていた。

「……は……？」

すると、目の前に大きな光が現れた。

恐る恐る近づいてその光に触れようとした時だった。

「君にならこの世界を任せられそうだ」

薄っすらと脳に老人のような声が聞こえてきた。

世界を任せられそうだ—の意味が理解できなく問い返す。

「それはどういうことですか？」

少し間が空いてから。

「君には、この世界に神として、いや『始神核へしんかく』として

あの世界を守ってほしい」

「それは一体……？」

訳が分からなかった。

今、自分に何が起きているのかさえ分からないというのに。

僕に、神？を……？

そもそも、神とは何をすればいいのか。疑問に思った羽島は問いかけた。

「神とは何をするために必用なんだ？」

返答はすぐに帰ってきた。

「調和と信仰のためだ、君は【神力】という力を手にする。神力とは民が君を信仰し祀ろうとすることで其の力を発揮する。」

「信仰を集める…ですか」

「そうだ、君は世界の創造主としてあの世界に秩序をもたらしてほしい」

秩序。つまりルールを定め環境の行き届いた世界にするというものだった。

それから、数秒悩み。

断る、のは失礼か。それに、断ったところでだしな。

「はい、わかりました」

最後に、老人の声の主は「そうか…頼んだぞ」とだけを言い消えた。其の瞬間、意識が飛び羽島はその場に倒れた。

都市防衛戦

第五話 「神になってすることは？」

目が覚めた。

あたりが暗い。

「[ライト]！」

すると、羽島の手から小さな光が現れた。

その光は羽島の周りをぐるぐる回りながらあたりを照らしてる。

どうやら洞窟のような場所に今はいるらしい。

「とりあえずは外に行かないにははじまらないよな」

風が吹いているほうへと羽島は足を進める。

外に出ようとすると急にまぶしい光が目を覆った。

目を開けると、そこには、工業都市のような街が目の前にあった。

どうやら人間が作った都市らしい。

「この発展からすると…かなり、時間が進んでいる？」

そう、羽島はあの術を使ってからかなり長い間寝ていたらしい。

その結果、人間たちは最先端の技術を駆使して都市を作り。その都

市の周りを高い防壁で囲っていた。

羽島が眠っていたであろう洞窟は山の上にあったおかげで、その都

市全体を見下ろすことができた。

そこで疑問がわいた。ならば生り物の存在は？―と。

「街を目指しながら探ってみるか」

そう、つぶやき都市を目指しゆつくりと歩き出した。

すると、以外にも発見は早かった。

草むらの茂みから声が聞こえたのでそつと覗いてみれば。おぞま

しい姿をした生り物、いや、もう『妖怪』というべき存在であろう。

妖力は、見たところ小さく下級妖怪といったところか。

よく考えれば自分に流れる、霊力と妖力の量が増えていた。

そのせいもあるのか、狐のような尻尾の数も2本から5本になっていた。

「どうやら、時間が経てばたつほどに靈力と妖力の量は増えるらしい。」

「そつと、その場を離れようとしたときに小枝を踏んでしまい、パキツ、という音が響いた。」

「その音を聞いつけた、先ほどの下級妖怪がこちらに気づいたらしく、こちらに向かってきた。」

「しようがない、相手をしてあげよう。」

「その時だった。」

「穢れだ！、撃て！」

「目の前の下級妖怪が銃声とともに倒れた。」

「遠くから人が近づいてきているのが見えた。」

「羽島はとつきの判断で尻尾と獣耳を隠し、人間の姿に化けた。」

「(はあ、一応練習しておいてよかった...)」

「すると、一人の兵を連れた女性がこちらの存在に気づき向かってきた。」

「私は、『八意 永琳』、貴方、怪我はない？」

「一応怪しまれないように怪我がないか確認するような素振りをして、答える。」

「大丈夫です！おかげで助かりました！」

「永琳は安心したかのように息を吐き。」

「よかった、貴方…いや、名前を聞いてもいいかしら？」

「羽島は愛想よく答えた。」

「冬菜月 羽島といます！」

「とても珍しい名前なのね」

「羽島は、そうかな？と心の中で思った。」

「まあ、いいわ。さあ、私たちの都市に行きましょう。あそこなら穢れに襲われることもないわ」

「言われるがままに羽島は永琳らについていった。」

「その道中、永琳が不思議そうに羽島に問いかけてきた。」

「「そういえば、羽島はどうしてあんなところ？」」

「「えつとですね、旅をしながらその道中、妖怪、穢れに襲われていて、

そのところを永琳さんに助けていただいたわけなんです」

永琳は、納得したようにうなずいた。

「私のことは永琳でいいわよあと、敬語もいいわよ、そんなに堅苦しいとお互いやりにくいでしょう?」

「そうだね、さすがになれない敬語は僕としても体力を使うからね」

そんなことを話していると、もう、都市の入り口までついた。

この後、この神（羽島）が都市の英雄（仮）になる日が来るともしれず。

第六話 「羽島が正体を明かすそうですよ！」

あれから行く当てもなく、結局、永琳の家に泊めてもらうことになった。

「すまないね、お邪魔するよ」

「はい、どうぞ。えっと、羽島の部屋は…ここでいいかしら」
永琳についてゆき指定された部屋に行く。

見た感じ部屋は畳でいうところの広さの10畳はあるだろう。

「結構広くないかな？この部屋で本当にいいの？」

永琳は別に問題ないわよーとだけをいい部屋を後にした。

自分の部屋か…

そんな懐かしい、あの高校時代を思い浮かべながら床に寝転がる。
そういえば高校時代に、

—あれは、僕が二年になった時の夏に

「先輩、羽島先輩！」

そんな、少女の声が聞こえ羽島はそちらに顔を向ける。

「やっと気づいたあ！羽島先輩、私結構大きな声で何十回も呼んでいましたすけどー！」

羽島は苦笑いをしながら。

「ごめん、ごめん。早苗、今日はどしたの？」

早苗は要件を、はっと思いだしたかのような顔をして。

「そうなんです！来週から夏休みじゃないですか！」

「はいはい、それで？」

適当な返事をした羽島に対して頬を若干膨らませ早苗はこう言った。

「羽島先輩のお宅に行ってもいいですか？」

特にやることもないし、問題ないかな。

家に居ても一人だし。

「別にいいけど。面白いものなんてないと思うけど…」

だって、うちには本が置いてある書斎以外何も無いのだが…

「え?!いいんですか!?!やった!」

何がそんなにうれしいんだか。

そう思いつつ。昼の時間が終わったのだろうか学校のチャイムが鳴った。

—ということがあったのだが。

そういや、あの約束したのこの世界《こつち》にくる四日前の話だったかな。

「早苗、今頃何してるかな？」

そんなことを思い出していると、目から雫がこぼれた。

—そうか、あんなことでも僕にとっては本当に楽しかったのだ。

あの日々が、ほぼ毎日とっていいほど僕についてくるあの早苗が今は…もう。

「羽島おきてー！」

「早苗!!」

周りを見ると永琳が驚いた顔をしてこちらを見ていた。

「急にどうしたのよ」

「あ、いや。ごめん。なんでもないよ」

そういや。僕が妖怪であり神である、とかいう厨二病設定を言うべきだろうか。

ああ、話そうとすると、なんかあ…うん恥ずかしい。

でも、まあ。泊めてもらっている以上はこちらのことを秘密にするのは失礼かな。

「永琳、あ。あの」

永琳は不思議そうに。

「どうしたのかしらっ？」

羽島は一息つき。

「僕は妖怪であり、神様のな存在なんだ」

そういい、人間の姿を解いた。

あー。うん。中二病発言乙。人生の終点です！ははh。

「神様ってことは知らなかったけど、穢れだつてのは知ってたわよ
え？今なんて?？」

「何、ポカンとした顔してるのよ。だから、貴方が穢れなのは知ってたわよ」

何故かわからなかった。ここに住む人間の第一印象は穢れつまり妖怪は敵であるという認識があるということではないのか、ということもなかった。

「ここは、穢れを嫌っているのではないんじや？」

永琳は言った。

「嫌っているのは、ここの都市の人であって私を含まないでくれるかしら？」

その前にそもそもの疑問。神であることに触れない理由と。なぜ妖怪なのかが分かったことだ。

「永琳二つほど聞いてもいい？」

「いいわよお」

「一つはどうして僕が妖怪だと分かったのか、二つ目は神であるということを疑わないのか」

以外にも永琳はすぐに答えを返してきた。

「そうねえ、まず一つ目はね。妖力を感じたからね。ただ、貴方の場合だけど他とは違うすごい量の妖力を感じるわね」

「まあ、そりゃ。君らが誕生する前からこの世界にいるからね」

永琳は驚いていた。

「羽島それって、貴方、300年前から存在しているの!？」

逆に羽島は — 300年も眠ってたのか…僕は。

心の中では驚きつつ、羽島は当たり前のように。

「そうだけど」

「羽島、貴方って人は…まあ、それは、また今度聞くとするわ。で、二つ目ね、今のを聞いて確信したのだけれど私たちの都市にも似たような方がいて、その方と同じ感じがしたから、ぐらいかしら」

意外にも「神様」だ、ということを感じてくれた同機は薄かった。

第七話 「羽島が可愛い少女と会うそうです！」

結局あの後も疑われることなく。数日が経過した。

現在は永琳から借りている部屋で魔法と妖力で生成した本で魔導書を作成中である。

「そうだ、あえて作成者は、〃ソロモン〃にしておくか」
すると、扉をノックする音が聞こえた。

「羽島、入るわよ」

「羽島、今日ちよつと。姫様のところに行かないといけないの。だから、姫様にも羽島のこと紹介したいから来てくれない？」

「姫様？まあ、予定はないから。いいかな。むしろ泊めてもらっている分際であれこれ言うのもな…。」

「分かったよ、それで今日の何時くらいから行くの？」

「永琳は少し悩んでから。」

「今日のお昼くらいかしらね」

「おっけ、了解」

「永琳は難しい顔で。」

「おおっけえ？の意味は分かんないけどわかってくれたならいいわ」

「永琳はそれじゃ、とだけを言い部屋を後にした。」

「さて、お昼まで時間はまだ、数時間あるこの魔導書を完成させるか」

そして、数時間後。

「終わったあー！」

それと同時に、トントンと扉をノックする音が部屋に響く。

「羽島、準備はできているかしら？」

「ああ、うん！今行くよー！」

外に出るたびに思う。

「この都市は広いなあ…」

そんなことを言っている僕に、永琳は微笑みながら僕に言う。

「いまさら何を言ってるのよ」

僕も微笑み返し。そうだねーと、答える。

「そういえば、羽島。あなたに私の能力を言ってなかったわね」

唐突に話しかけられたので少々対応に焦るもすぐに落ち着きを取り戻す。

「能力?？」

永琳は少し驚いた顔で、

「え? 能力を知らないの?」

「う、うん」

えっと、これは知っておかないとまずいやつなのかな?

と、心の中で思った羽島に永琳はこの世界の人間や妖怪などが持つといわれている能力についての説明を余すことなく叩き込まれた。

「えっと、つまり。全員が全員ではないが、それぞれ、く程度の能力とついた能力を身に宿し生まれてくることがあり、能力は一つしか持っていないのと、能力の発言は個人差があつて、永琳は『あらゆる薬を作る程度の能力』を持つていというわけなんだよね?」

永琳は、大体そんな感じね。といった。

(大体って…まだ説明あつたの…てか、チート過ぎ)

そんなこんなで、その「姫様」のお宅…いや、屋敷にいたわけなんだが…

広くないですか? 簡単に見て僕が知る限り、これは、東京ドーム2つ分の広さがあるな。

ひ、姫様とは聞いてたけど、ここまでとは…

永琳は気にすることなく。こつちよーとだけを言い羽島を呼ぶ。

どうやら、姫様の屋敷に魅入られているうちに門番的な人お話をしていたらしい。

そのまま、案内役の人が来て羽島と永琳は屋敷の奥の部屋へと案内される。

「こちらで輝夜様がお待ちです」

ん? 輝夜?、どこかで聞いたような…

案内の人が先の来た廊下を帰り、永琳が扉を開ける。

その先にいたのは、

「あら、永琳。今日は遅かったのね。で、そちらの方は？」
歳で言うならば16くらいの少女がそこにいた。

第八話 「羽島に恋い焦がれる姫様がいるらしいです？」

「あら、永琳。今日は遅かったのね。で、そちらの方は？」

永琳は、目の前の少女に敬語で話し始める。

ふむ、この16歳ぐらいの少女が姫様ってことか。

「姫様、こちらのものは私の弟子にございます」

ん？—弟子？はい？

ポカンとしている僕に永琳は鋭い眼光をこちらに向ける。

あ、察し。

「はい、永琳様のところで薬師の修行をさせていただいている、『冬菜月 羽島』といます」

すると、姫様は微笑みを見せながら言う。

「そう、私は『蓬萊山 輝夜』ほうらいさん かぐや、『よろしくね』

「こちらこそよろしくお願いします」

すると、永琳はこちらに來た本来の目的に入る。

「では姫様、稽古のお時間です」

すると、輝夜は—わかったわ。と、いい別の部屋に向かう。

羽島もそのあとを追いかけると、どうやらそこは道場のようだ。

壁には弓がかけてある。

弓道か。そういうえば春の大会の時は全国大会に行ったけか。

「では、姫様。いつもどうり、いきますよ」

すると、永琳は輝夜にあれこれ弓技を教え始めた。

いやあ、なんか昔の自分を思い出すなあ。こんな感じだったけか、

最初の僕は。

僕も、やってみるか。

「永琳様、僕も弓道を練習させていただいてもよろしいですか？」

永琳は少し考え輝夜に了承を求めぬ。

「姫様、私の弟子に弓道を練習させてもよろしいですか」

輝夜は迷うことなく—いいわよ。といった。

「ありがとうございます」

そして弓と矢をを持つ。

そういや、早苗（あいつ）もいつてたな。弓道は三位一体だって。今思えば確かにそうだと思える。昔の僕はただ暇だからと言って弓道をして失敗ばかりしていた。

はあ：まあ、昔のことだ気にしない、気にしない。

素引きをしてつと…、こんな感じかあ。

少し、張りが強いか。

よし、準備はできたつと。

まず深呼吸。目の前的是は直線距離は大体40くらいかな。たしか本来は28だっけ。

まあ、今はそんなことはいい。集中だ。

目を閉じ羽島は精神を統一し意識を最大限まで集中させる。

そして弓をつがえ。引く。

永琳と輝夜はいつの間にか羽島の美しい姿に見とれていた。

羽島は、限界まで視界に映る絞った。

そして、キャンツ！、という音を立てて羽島の放った弓が的の中央を射ていた。

「はあ。久しぶりにやったから。失敗するかと思ったあ」

すると、すぐそこから拍手の音が聞こえる。

音のするほうへと羽島が顔を向けると永琳が驚いた顔で羽島に言った。

「羽島、貴方つてすごいというか、それを通り越して呆れたわ」

驚いたのは、姫様も同様のようだ。

「羽島、っていったかしら。あなた、どういう集中力しているの？」

「いえ、昔。友人に誘われてよく練習していたもので、姫様も鍛錬を積みばこれくらいはできるようになりますよ」

私もこの方みたいに…

「あ、いやー何を考えているの私はー」

どうやら輝夜の発言が薄っすら永琳にも聞こえていたらしく。

「姫様、どうかなさいましたか？」

輝夜は慌てて。

「いや！なんでもないわ!!」

そのまま、稽古の時間も過ぎ羽島と永琳が帰った後に輝夜だけが道場に残っていた。

すると、輝夜はその小さな口を開いて…

「私はあの、『羽島』という方に見惚れているっていうの!!」

そんな言葉が誰もいない静かな道場に大きく響き渡った。

特別回 「聖夜の晩餐会！」

空には曇が覆いだした…そんな頃だった。

羽島は…という。永琳の家であるものを作っていた。

そのあるものというのは、皆が知っているあの「クリスマスツリー」だ。

クリスマスツリーといっても外で採れる材木には限りがあった。

丁度いい大きさの木を探すために、羽島は一日の四分の一の時間を費やしてしまったのである。

そして、昼を過ぎたその頃であった。

「やっと…完成だあっ!!」

という、羽島の声が永琳の家中に響く。

そんな羽島の大きな声を聞きつけた永琳が慌てて羽島の寝泊りしている部屋に飛びこんでくる。

「羽島どうしたの!?!」

羽島は、大きな声で叫んでしまったことに少し反省しつつ、今、自分がしていることを永琳に説明する。

「そういうことだったのね…なんか心配して損した感じだわ…」

「あはは…ごめんごめん」

そして、羽島が作り終えたというクリスマスツリーを永琳はまじまじと眺め始める。

「どうかな?」

そんな、羽島の言葉に永琳は。

「どうかな?と、言われても私は、そのクリスマスツリー?のことを何も知らないから…まあ、羽島がこれで完成というのならそれでいいと思うわよ」

そうかあ。と羽島は言いつつ。

「そうだ、さつきも説明したんだけどクリスマスにはいろんな人を家に呼んでパーティーをするんだよ。それで、なんだけど…」

続きを言おうとした羽島の言葉を遮るように永琳は。

「はいはい。分かっているわよ…姫様も誘って三人で、そのパー

ティーをすればいいんでしょ?」

「お話が早いことで…で、どうかな?」

はあ…。と、永琳は小さな溜息をこぼしつつ。

「分かったわよ。今晚、姫様を招待してみるわ」

「頼んだよ」

そう、永琳は言うのと立ち上がり輝夜のもとに行く支度をし、輝夜の家に向かって行ってしまった。

「さて…この間に、と」

羽島はこの都市に売っている鳥の肉などを探しに外へ出る。

羽島は心の中で早くパーティーが始まらないかとウキウキしていた。

その理由としては、金銭面での心配が全くなく、自由に買い物ができ、自由に自分の思った通りに料理が作れるということだった。

自由に買い物ができるというのは、金銭面で心配がいらなかららしい。

どこのお店に行っても支払いは永琳で言えばタダでなんでも譲ってくれるらしい。

そして、普通の人であればこんなことでは喜ばないだろう。

だが、羽島はあれこれ一人で何かをしたりするっていう経験がないため余計に心はがはしやいでしまっているのかもしれない。

そんなわけで、買い物をしてきたわけだが…

量がな…多いんだよ…

見たところ20キロ以上の重さはあるだろう…

それを羽島は当たり前のように片手で軽々と持っていたせい、周りの人たちに凄い目で見られていた。

そんな人目も、今の羽島にはどうでもよかった。

そして、ウキウキした気持ちがあざんと高まり、ついにはその場でスキップまでし始めてしまった。

そして、永琳の家につき台所に立ち…

「よし…!」

羽島にとって料理は初めてではなかった。

羽島がこちらの世界にくる前までは、早苗と一緒に何度か作ったり二人でクリスマスまで羽島の家で準備したりなどだ。

羽島も思ったよりはペースよくサクサクと次から次へと料理を完成させていく。

「これは…こう、かな？」

そんなことを何回も口癖のように何回も小声で言いながら、料理をする。

そんな、羽島の姿を誰が想像できただろうか、？

作者もこの展開にはびっくり（笑）！！

五時間ぐらいだろうか丁度、夕日が窓から見える都市の壁からゆっくりと隠れるそんな時間にだった。

「やつと、完成したあつ！」

羽島は、2×5の大きなテーブルいっぱい先ほどまで作っていた料理で埋め尽くしたのである。

これには、作っていた羽島も。

「いやあ…作りすぎたね」

すると、玄関の方から扉が開く音がする。

羽島は顔をそちらの方に見ると、永琳と輝夜がテーブルに並べられた料理の量に驚きながら、ただ、呆然と立ち尽くしてた。

本来、永琳の家から輝夜の屋敷までは歩いて20分もかかるかかからないくらいの距離なのだがこの時間のかかりようだ、稽古をしてきたのはなんとなく羽島にはわかった。

「こんばんは、姫様。わざわざ時間を取らせてしまいましたんでした」

そんな羽島の謝罪よりも輝夜は。

「こ、これ。全部。羽島が作ったの…？」

「もちろんです」

すると、永琳は。

「貴方ってやつぱり変よ…」

（しっけいな…！）

それじゃあ。と羽島が言うと三人分の席を用意し。

輝夜と永琳はそれに従うように席に座り。

「それでは、どうぞ」

と、羽島が言う。

「いただきます(ますわ) ます」

先に、羽島の料理に手を付けたのは輝夜だった。

輝夜が手に取ったのは鶏のもも肉で作られた唐揚げだった。

これは、羽島が揚げ物料理の中で最も解くとするものの一つだ。

そんな、羽島の得意料理の一つだとも知れずに輝夜は口をいっぱい
に広げ唐揚げを一口でほおぼる。

ツサク!という音が部屋中に響き…

輝夜はというと…

「なにこれ?!羽島!これどうやって作ったの!?!」

輝夜の口からは歓喜の声?のようなものが上がった。

「鳥のもも肉を生卵に軽く浸して小麦粉で包んで衣をつけて油で揚げ
たんです」

「そ、そんな簡単な料理でこんなにおいしいものがつくれるの…!」

「喜んでいただけだったのであれば幸いです」

永琳は隣にあった手羽先を手取る。

「これは…?」

「それは、そのまんまかぶりつけばいいんだよ」

永琳は羽島に言われるがままに手羽先にかぶりつく。

「これは、とてもおいしいわ」

そして、一時間と少しが経った頃に羽島が台所へと姿を消す。

数分後に羽島が戻ってきたのだが、羽島の両手には何とも立派な、
綺麗に飾りが施してある生クリームケーキがあった。

永琳と輝夜は初めて見るケーキの存在に目を光らせながら、今か今
かと待てんと言わんばかりの目で羽島を見る。

「少し待っててくださいね」

そう、羽島が言う。と羽島は包丁を取り出し綺麗にケーキを切り分け
る。

ケーキが切り分けられると小さなお皿にケーキが一切れずつ乗せ

られ永琳と輝夜の席へと運ばれる。

ケーキを先に食べたのは永琳だった。

「姫様!!これは、先ほどの料理とはまた違ったおいしさがありません!」
「本当なの永琳!!」

こんな普段見ることのできないような子供のようなやり取りを少し近くからほほえましい笑顔で見守る羽島がそこにはいた。

そんなやり取りが30分ほど続き。

永琳と輝夜は二人してどうやら疲れたみたいで、ソファで寝てしまった。

時間的には夜の10時を回ったころだろう。

そして、羽島はそんな寝ている二人の隣にそっと。ラッピングの施された小さな箱を二つ置き――

「メリークリスマスだね」

といい自分の部屋に戻っていった。

箱に何が入っているのか…それは、サンタさんの秘密。

第九話 「羽島と月の移住計画!?!①」

なんやかんやで永琳と出会ってから2年が過ぎようとしていた。ちゅんちゅんと鳴く鳥の声が春が来た。と言わんばかりに羽島の耳に響く。

輝夜と初めて会ってからというものの、一週間に三回はもう輝夜の稽古に付き合っている状態だ。

その他には、いつも通り術の練習であったり、日々の鍛錬だ。

そして、今日は輝夜の稽古に付き合う日なのだが。

流石に疲れが溜まってきているのであろうか。鳥の鳴き声が耳にいくら響こうと、全く起きる気配がないのだ。

そんな、気持ちよさそうに寝ている横で今にも怒りをあらわにもしそうな、いや、もうすでに手遅れなことは誰もが見てわかることであろう。そう、怒りの感情に満たされた『輝夜』がそこにはいた。

「羽島あゝ」

なお、羽島は熟睡中。

起き上がる素振りすらない。

すると輝夜は、金槌を手を持ち…

ガンツ!。という音だけが部屋に響き渡った。

——朝食にて——

「姫様、痛いですよお」

どこか嬉しそうに、そして、どこか拗ねたように輝夜は答える。

「起きない羽島が悪いわ」

そして、輝夜はそっぽを向く。

このやり取りはこの2年で何十回あったのだろうか。

と、頭を抱えている永琳は同じ食卓に着き。淡々と食事をとっている。

余談だが、永琳の家に泊めてもらってから長くなるが流石に泊めてもらっている以上何もしないわけにもいかなかったのか、羽島は此処の料理係?的な存在になっていた。

「姫様、こちらの豚汁?というのも中々いけますよ」

よく話をそらしてくれた!。と、一人喜ぶ羽島の姿があった。

「そう?では、いただきましよう」

満足そうにほほを緩ませながら、歳相応の笑顔を見せ豚汁を口に運ぶ輝夜を見て。

その場にいる二人は互いの顔を見合ってクスクスと笑った。

そしていつも通りに、稽古を終え。その帰宅中。

「ねえ、羽島。貴方、私たちと月に行かない?」

急にどうしたのだろうか?すこし驚いた羽島であったが、すぐさま返答する。

「どうして?」

「月に行けば、私たちは毎日、こんな幸せの日々を送って暮らしているわ」

永琳の発言は妖怪である羽島のことを考慮したうえでのことか、それは、羽島にはわからなかった。

だが羽島は、

「永琳、僕は…」

——その裏で——

「鬼子母神〈きしもじん〉様、ついに、あの日が来ます」

薄っすらと暗い洞窟の暗みで一人何かをあざ笑うものがいた

「そうじゃのう、やっとか、この時をどれだけ待ったことか」

洞窟を抜けたその前には何千という妖怪の群れがいた。

羽島たちはこの1週間後にこの世界初の大戦が行われるとは知る由もなかった。

第十話 「羽島と月の移住計画!?!②」

「羽島、貴方は夢を見ているのね」

女性の声だろうか…どこか聞いたことのある声だ。

—誰だ

「貴方を知る者。今はそれだけ」

—僕に何の用だ？

そんな僕の問いにソレは答える。

「貴方は、眠りについたまま。私達”はそれを望んでいた」

—私達？

「そう、貴方はあったことにはないかしらね。そうね、いつか話さないといけない時が来るわ。その時にね」

すると声の主はどこかへ消えたのか声が聞こえなくなった。

—一体何なんだ？

すると、目の前が急に光りだした。

「——うあつ！」

あたりを見渡すとそこは永琳に借りている部屋だった。

どうやら羽島は夢にうなされていたらしい。

「夢…でも、それにしてもはリアルというか」

そんなことをつぶやいていると。

急に扉が開き永琳が心配するような顔で部屋に入ってきた。

「羽島！大丈夫かしら!?!」

どうやら、さっきの羽島の声が聞こえていたらしい。

「ああ、いや。何でもないよ」

安心したかのように永琳は一息吐いた。

「そう、良かったわ。羽島が急に大きな声で叫ぶから」

「ごめんごめん」

永琳は—いいわよ、何かあったら言ってね。とだけと言って部屋を後にした。

—一体あの夢は何だったんだろうか。

「そんなことを考える余裕は、今はないか」

——それは、昨日のことだった。

「ねえ、羽島。貴方、私たちと月に行かない？」

急にどうしたのだろうと？すこし驚いた羽島であったが、すぐさま返答する。

「どうして？」

「月に行けば、私たちは毎日、こんな幸せの日々を送って暮らしているわ」

永琳の発言は妖怪である羽島のことを考慮したうえでのことか、それは、羽島にはわからなかった。

だが羽島は、

「永琳、僕は…月には行けない」

永琳は今にも泣きそうな顔で羽島に言う。

「どうして？」

そんな、永琳に僕は言った。

「僕は、結局のところは妖怪で永琳は人間だ。永琳だって知ってるだろう？この都市では、僕みたいな妖怪は穢れと呼ばれて嫌われているだろう？」

「そ、そうかもしれないけれども」

そして、永琳は本来の本题に入る。

「だって…ここにいたら羽島が死んでしまうかもしれないのよ！」

「どういうこと？」

しまった。という顔をしながらも永琳は泣きそうになりながら話を続ける。

「ここにいる都市の住人を月に移住させる計画が今、この瞬間にも、その計画は進められている。そしてそれが実行されるのは『明後日』なの」

「それで、どうして僕が死んでしまうのかが、わからないんだが」

永琳は、大きく息を吐きこちらを見て言う。

「明後日にこの都市に核を落とすの」

ん？核？核ってあれか？原子爆弾、水素爆弾、中性子爆弾。とかだっけか？

「それは…何で、そのお、核を落とすのさ？」

「それは…都市の機密情報を守るためよ。この都市には今の穢れにはない技術が山ほどあるのよ、だから、穢れには此処でこの都市とともに消えてもらうの。だから、羽島…」

永琳の言葉を遮るように続けて羽島は言う。

「ごめん、それでも僕は此処にいなきやいけない。忘れてるかもしれないけど、僕この世界の神様やつてるから…！妖怪だろうが人間だろうがどちらかを優先するようなことは、間違いだと思っんだ」

「だから、ごめん」

街道の道の真ん中で夕焼けに照らされなが二人はそれぞれの思いを伝え合うのであった。

第十一話 「羽島と月の移住計画!?!③」

今日は、そのお。明後日の計画の日なのだが。

何だろう、今日はいいいい：お天気だなあ。

「めっちゃ、曇ってます。はい。嘘つきました。しかも、今にも雨が降りそうです。」

今日、なんだよな。月に移住するっていう計画は。

「はあ、まず部屋を出て永琳がいるであろうリビングにでも行きますか」

そっくり、羽島はそつと腰を持ち上げリビングへ足を進める。

リビングに向かう途中。後ろから、永琳に声をかけられた。

「羽島、そのお。私達は今日の午後月に月に出発するの」

どこか不安げの永琳の言葉にぎこちなさを感じながらも羽島はいつも通りに接する。

「そうなんだ、気を付けてね。あ、それと輝夜には内緒だよ？ここに残るってことを言ったら、色々面倒になりそうだからね」

「分かったわ」

すると突然。部屋のノックがし、急に一人の都市の軍の制服を着た兵が永琳に焦るかのように言い放つ。

「永琳様っ!!穢れどもがこの都市に数千の大軍を率いて向かってきております!」

この情報には永琳も驚いているのか…

「なんですって、まさか、月に移住する計画も早まるのかしら?」

数分だろうか：兵と話し終わった永琳は焦りを覚えた顔でこちらに来る。

「羽島、いますぐ逃げて!お願い!」

「どうしたのさ?」

さらに永琳の焦りが増す。

「このままじゃ、核が落とされるのも時間の問題なのよ」

其の瞬間。サイレンの音が都市全体に響きアナウンスが流れる。

『都市全域に緊急避難。都市の住人は今すぐ都市の中心、セントラル

までお集まりください』

では、今回初めてこの場で使うけど、まあ…いつか。

『目術・遠視』

あらら…こりやあ、逃げ道がないね。

羽島が見たものとはこの都市全体を囲んでいる妖怪の群れであった。

都市の兵が今戦っている状況かあ。

この場合、都市の兵を撤退させるための時間稼ぎが必要になるよな…。

この時、羽島にはある一つの考えがあった。

ここで、時間稼ぎをしますか。

「永琳、分かったよ」

「そう、な r…」

ドスツ、つと永琳の腹に羽島が突き立てた拳が入り永琳はその場に気絶する。

どうやら、状況説明に来ていた兵に永琳を託し羽島は都市の正門へ走り出した。

「時間は30分くらい稼げれば上出来かな」

もう少しスピードを上げないと間に合わないか。

『速度強化』

羽島の走るスピードはバイクが高速道路で走る速さ以上のスピードで都市の街を走りぬく。

普通に走れば正門まで20分のところ、なんと1分半でついてしまった。

目の前を見てみれば、兵はちょうど撤退支援活動を互いに状況確認をしながら少しづつ後退している途中であった。

「さあて、戦争（ゲーム）を始めようか」

正門が閉まりかけるのと同時に羽島は一人正門の外に何事もなかったかのようにすり抜ける。

正門の前は兵たちが煙幕を炊いたのかあたりは煙だらけだ。すると、大きな風が煙幕を邪魔だと言わんばかりに強く吹き付け

る。

そして、煙幕が晴れると羽島の目に写ったのは先程の遠視で見た妖怪の群れである。

「ひやあく、多いなあ」

すると、妖怪たちは何かの合図とともに急に襲い掛かってきた。

「さあ、始めようか」

霊力、妖力、魔力を全力で開放し。

人間の姿から本来の狐の妖怪の姿に戻る。

だが、妖怪たちはそんなことを気にせずになおも考えなしに突っ込んでくる。

「あああ、全く…まず手始めに…かな」

すると、羽島は左手を妖怪たちにかざし詠唱を開始する。

「僕は生きてきた間何もしてこなかったわけじゃない。これは、僕のとっておきだ…！手加減はできないからな！」

【夜天光：夜天象】

羽島がこの人生において編み出した禁忌魔法の一つである。

すると、すべての妖怪たちが足を止めた。

そう、妖怪たちには見えているのである死が。死の太陽が。

羽島はあえて妖怪たちに聞こえるように言った。

「この黒い太陽は、すべての命の終わりを告げる死の光をその身に照らしつける」

急に黒い太陽の光が妖怪たちを包み込むように照らしつける。

すると、光を浴びた妖怪たちが次々と灰に代わっていく。

そして、妖怪たちはおろか、草木までが枯れ灰と化す。

そんな光景を見て羽島は無情にただ立ち尽くしていた。

第十二話 「羽島君が妖怪の群れの主と戦うらしいです！」

ありとあらゆる生物の残骸…いや灰というべきであろう。

その灰が羽島を呪うかのように風と共に吹き付ける。

やがて、風が収まると次から次へと妖怪の群れがやってくる。

ふとその中に、妖力からして中級妖怪だろうか一匹の鬼？というよりは、14、15の少女？のような妖怪が羽島に近づいてくる。

「誰かな？」

そう、羽島は問いかけると鬼は答える。

「わしは鬼子母神(きしもじん)というものじゃ。お主…何者じゃ？妖怪にして人間にくみするとは？」

すると、羽島は。

「それは、僕が決めることだからね」

そして、鬼子母神は不敵な笑みを浮かべながら言う。

「面白いことを言う奴じゃのう。それにしてもお主、ちと妖力の量が異常じゃな」

「まあ、君たちが存在する前からいる大妖怪だよ？尊敬してくれてもいいと思うんだが？」

そんなことを言っていると鬼子母神は。

「そうじゃ、せっかくじゃ。名を聞こうかのう」

「冬菜月 羽島だよ」

「羽島か…面白い名じゃ。わしは麟(りん)じゃ。よりしく頼むぞ」

そう麟が言うと。拳を構える姿勢をとる。

妖怪たちは羽島と麟の二人を無視するように都市に向かう。

すると、都市の自動防御システムのようなものが作動したらしく防壁からターレットが現れた。

「でこちらも始めるかのお」

「そうだな」

そして、互いに攻撃の姿勢をとる。

静かに風が二人の間を吹き抜ける。

風がやんだ瞬間：先に動いたのは麟だった。

右の拳に妖力を乗せ、羽島に当たると同時に妖力を爆発させ衝撃波を作る仕組みなのは羽島にはすぐわかった。

—だが

「速度がないな。瞬足強化」

羽島は、自分に速度強化をかけ当たり前のように受け流す。

「まだまだじゃー！」

麟は追撃をするように振り返り次は両腕に妖力を込める。

「くっ！」

羽島は一度目の右腕から放たれた攻撃はかわしたが再度の左からの二撃目が頬をかすめた。

「危ういんじゃないかい？」

羽島は苦しそうな声を出しながらも。

「いいや、全然いけるよー！」

「いつまで、その口がほざけるか楽しみじゃー！」

急に羽島は右手を地面に向ける。

—そして

【天変地異：天地逆転】

すると、羽島を中心とした半径50メートルの地面がまるで重力が逆さになったかのように空に飛んでゆく。

「つちい！相変わらずケタ違いな技ばかり使いおって！」

麟は苦しそうな声を上げつつギリギリなところでかわす。

「なかなか、やるね！」

「こっちはギリギリじゃー！」

まだまだ、と言わんばかりに羽島は畳みかける。

【狐火：炎厄災へえんやくさいく】

天地逆転よりも広範囲な炎が野原全体を包み込む。

その炎は土までも燃やし尽くす。

麟はこれにはさすがによけようもなく消えることない炎が麟を襲う。

「くうっ！」

「まだまだだよ！」

【破術：空衝撃へからしよ上げきく】

空気を大きく振動させ高範囲にわたり衝撃波を作る。

鱗の腹部の中心に

「くはっ!!」

鱗は、まだじゃーと、いいつつも。羽島には、今の鱗が限界に見えていた。

だが、鱗は。

全身、自分の血に染まったその体でその場に立ち上がった。

第十三話 「羽島がどうやら決着をつけるらしいです！」

荒野と化したその平野に立つ【鬼】と【狐】は互いに向き合い、攻撃の姿勢を作る。

すでに、鬼の体はもうすでに限界だ。

—だが

「やはり、戦いはよいのお、血がたぎるわい」

そう麟は言いながら笑っていた。

そして、いつの間にか羽島も笑っていた。

「そうだね」

「では始めようかのお！最後の戦いを！」

「ああ！」

先に動くのは、やはり麟だった。

ただ、さつきとは違った姿勢だった。

「行くぞ！羽島あ！！【覇拳へはけん】！！」

麟は大きく一步を踏み出し右の拳を引く。

—まずい！これは…避けられない！

そして二歩目で全妖力を右の拳に集中させる。

【自身硬化！】

そして、三歩目！！

麟の右腕より放たれるその拳は、大気をゆがませ一直線に衝撃波とともに飛んでくる。

麟と羽島の距離は50はあったのだがほんの2秒で羽島の目の前まで迫っていた。

「つくー！【破空へはからん】！！」

全ての衝撃、物理攻撃を幻影によって回避する、羽島の必死技ともいえるだろう。

「お主は、やはりどこまでケタ外れな奴なんじゃ」

羽島は—っふ。と笑い。

「それは、僕に対する誉め言葉として受け取っておくよ」と、その時だった。

都市からロケットが打ち上げられた。

つまり―羽島の目標は達成されたわけだが…

同時に命の危険を示していた。

「なんじゃ？あれは？」

命の危険とは、なんなのかというと…

どうやら、そのロケットが全部打ちあがったら。

この都市を中心に核爆弾を落とすらしい。

だが、羽島は妖力を使いすぎた。魔力だけじゃ都市を破壊するほどの爆発をどう防ぐか…

そこで、羽島はある考えが頭の中に浮上した。

「麟、少しまずい状況なんだ。『お互い』にね。少し手伝ってくれよ？」

「どういうわけじゃ？」

説明してる暇はないのになあ…

「なんというか、あと少しでこの都市は消滅する。君らにこの都市の情報を渡さないために、核爆弾という兵器を用いて都市を中心とした広範囲のものをすべて吹き飛ばす。その威力の爆弾を防ぐには、僕の温存されている霊力、妖力じゃ足りないんだ」

麟は、どうやら納得してくれたようで妖力を橋渡しではあるが羽島に分ける。

その妖力で羽島は。

【永久結界】

これは、ソロモンの魔導書に書いてある最強防御魔法といえるだろう。

魔力と霊力と妖力からなる未知のエネルギーを融合し、それを広範囲な密度で構成されるその結界はどんな攻撃を受けようともビクともしないだろう。

「お主…こんな技まで隠しておったのか…それに、妖力以外の力も感じる。お主やはり何者なんじゃ？」

「それは、これが終わったら答えるよ」

——最終準備段階に入ったロケットの中では…

永琳はロケットの発射前の振動と音によって目を覚ます。

「あ、れ…ここは、どこなの？」

すると、永琳が起きたことに気が付いた輝夜が心配そうに永琳に近づく。

「永琳大丈夫!？」

輝夜の存在に気づいた永琳は、ツは!。 つと思いついたかのように輝夜に問いかける。

「姫様…羽島は?」

輝夜は不思議そうな顔をして。

「羽島?…このロケットには乗ってないけど…」

(嫌な予感がするわ)

そう、永琳の予想は的中していた…が。

もう、遅かった。ロケットは今丁度、都市を飛び立とうとしていた。

永琳は慌ててロケットの窓に顔を付け下を見る。

打ち上げてから、まだ、そこまで高くはなく都市の外側を見渡すぐらいの高さまで来たところで、雲が視界を遮った。

「羽島っ!」

永琳はその場で泣き崩れてしまった。

そんな永琳の姿を見て。羽島が地上に残っているということを感じ輝夜もその場で泣いてしまった。

——羽島と隣は…

その時、最後のロケットが打ち上げられた。

そのロケットから黒い球体上の鉄の球が降ってくる。

そしてその瞬間。

大爆発を引き起こし一瞬で都市を包み込む。

「なんなのじゃ…これでは、この戦いは無意味だった、とでも言うのか?」

そんな都市が消えゆく光景を眺めながら羽島は薄れゆく意識の中、ゆっくり地面に。

旅へと

第十四話 「羽島が自分の能力を発見するそうです！」

あの爆発から何日たっただろうか…

いま、羽島はいろいろな意味で窮地に陥っている。

―それは数日前のことである

麟との戦いの後、核が都市に落とされ爆発する直前。

羽島は麟から余った分の妖力を分けてもらい、霊力、妖力、魔力を駆使し防壁術式を展開するが。

力を使いすぎたせいか、すぐにその場に倒れてしまったらしい。

その後は、麟が羽島の介護をしていてくれたらしいが…

途中で飽きて約二日放置していたらしい。

どうやら、羽島はその二日後に目を覚ましたのだが…

「これは…」

どうやら、洞窟のようなところいるらしく、壁には布が巻かれている木の棒が薄っすらと火をともしてあった。

近くには食料だろうか…机の上に様々な果物？のようなものがある。

そして、グルグルと体に紐が巻かれて、天井から吊るされている？

―ナニコレ？

すると、外からだろうか。誰かが歩いてきている音が聞こえる。

「おお、羽島起とったのじゃな」

と、ゆっくりとこちらに近づきながら麟は言う。

「麟さん？これは…」

なんやかんや、あって、今に至るのだが…

なお、絶賛洞窟で吊るされています！（笑）

「麟…ここから降ろしてくれよ！」

すると、麟は。

「なんじゃ？特等席じゃぞ？儂が折角、お主の目の前でおいしそうに食しているというのに何なのじゃその態度は…ちと改めんか」

「改めるのは君の行動だよおお！」

麟は、やれやれと、溜息を吐きながらゆっくりとこちらに来て縄をほぐく。

「はあ…やっとなんか解放された」

そういえば、永琳と輝夜は元気かな…

と、羽島は急に二人のことを考える。

そんな、ことを考えていると麟が急に割言ってきた。

「そういえば羽島、お主の【能力】は何なのじゃ？」

（ん？能力ってあれだよ。永琳が話していた…）

「僕は、能力なんて持ってないと思うけど…」

麟は若干呆れた顔をして羽島に言う。

「なんじゃ？自分の能力の知り方も知らんのか？」

羽島は心の中で…

—え？何？わかるもんなのあんなチート能力。

「羽島、ちと手を貸してみ」

言われるがままに羽島は恐る恐る右手を出す。

すると、麟は羽島の手を握るや、ぶつぶつとつぶやき始める。

「なんじゃと…!？」

「え、どしたの？」

麟は、この世の終わりといわんばかりの顔で羽島に言う。

「お主の能力じゃが…二つもあるぞ…」

「え？二つ？」

「そうじゃ」

—え？永琳の説明じゃあ、能力は一人一つって聞いてたけど。

「ちなみに、その能力とは…？」

麟は大きく深呼吸をしこちらをまつすぐ見据えて言った。

「お主の能力は【ありとあらゆるものを具現化する程度の能力】と【能力を与える程度の能力】じゃ」

そして、洞窟の中は静まり…

羽島は口をゆっくりと開き…

「え？ナニソレ、チートじゃないですかあああつ！」

特別回 「二人の年明けどんちゃん騒ぎ!？」

寒いな…それが今の羽島の率直な感想である。

現在羽島は療養中ということで麟と一緒にいるのだが…何とい
かな羽島の扱い…

まあ、そんなことは置いておいて。今日は年明け前日、大みそかとい
う訳なのだが。

まあ、羽島はいつも早苗と二人で年を越していたもんですから、何
をすればいいのかなんて大体わかっているつもりだ…

でも…この辺に新年のお参りができるような神社なんてないと思
うけど。

話は変わって羽島だが現在原木をひたすら切って集めているとこ
ろだった。

特に今住処（拠点）にしているところに暖房器具があるというわけ
でもなく、そのことを麟に相談したところ、自分で採ってくれば良い
じゃろ?と、返されてしまった。

それがこの状況なのである。

「まったく、麟も集めてくれよ…」

そんな雪が一面広がっている銀の世界の前では羽島もこれには感
動したものだ…

今は、感動の感という文字すら頭にはないだろう。

だが、原木を集めるついでに能力の練習もできる、これは羽島に
とっては悪くない環境ともいえる。

「そろそろ、木も集まったし…練習しますか…」

そう羽島は言うのと近くの切り株に向かって右手をかざし…

『創造：刀』

羽島がそういうと先ほど羽島が右手をかざしていた切り株に刀が
創造された。

「成功だあ…」

とは言うもののまだ、未完成…羽島の能力はまだ完全というほど万
能ではない。

ありとあらゆるもの…それは、世界を壊すことも可能な力…逆にとらえれば、世界を創る事ができるということだ。

羽島は合間合間で何度も自分の能力の鍛錬をした。鍛錬といってもそこまで難しいことをするわけでもなく、さっきの手順通り刀を創造したり、逆にその刀をその場から消失させる、というものの繰り返しをひたすら行うのである。

羽島はこの作業を三時間ほどして洞窟へ帰ることにした。

「そういえば…もう年を越すのかあ…」

そう、明日になればもう次の年になるのだ。

そこで羽島は、今年も終わるということでちよつと豪華なパーティーを開こうと考えていた。

そんなことを考えながら洞窟に行くこと…

「麟様あ〜…よう〜無事でしたあ〜!!」

などと麟の前でなぜか土下座をするもの。

他の者は皆、目に涙を見せながら麟を見ていた。

そんな小鬼妖怪の集まりがなぜか目の前に広がっていた。

「麟さんや…」

羽島はそんな聞こえるはずもない声で麟を呼ぶが聞こえるはずもなく、数分その光景を眺めていると麟の方から羽島の存在に気づいてくれたらしく寄っていく。

「どうしたのじゃ?なに、今夜は景気よく行こうじゃないか!」

「そ、そうだね…」

羽島は麟から目をそらしつつ今日の羽島のしようとしていることを話した。

すると麟は。

「おーい皆…今宵は宴じゃぞ!!この羽島島男が我らに豪華な飯を用意してくれるそうじゃぞー!」

その麟の声の合図とともに妖怪たちの目が羽島に向く…

(ひー…これ、今すぐ用意しないとまずいやつ…)

麟は羽島の肩に手をポンと置き。

「頑張るんじゃぞー♪」

といい妖怪たちのところへ行ってしまった。

「ああ、そうかいそうですか！やりますよ!!」

それならと羽島は木のテーブルを創造しそこに次々とあり得ない量のお節やパンや麺類などの料理をひたすら想像し、それを麟に無理やり運ばせる。

そんな作業が五時間以上続いたというのは秘密だ。

そして夜になり小鬼妖怪たちは別々に点々とどこかへ行ってしまうた。

そして、麟と羽島が二人になったわけだが：

「羽島や、わしはなにも食べ取らんで…」

などと言われるのも大体予想していた羽島は寿司を創造しテーブルに置く。

「おおー！これまた豪華な！では早速いただくかのお」

羽島は大きなため息を吐いて口いっぱいには寿司をほおぼる子供

(麟)を見る。

麟は羽島を見るなり。

「なんじゃ？儂に惚れたか？」

などと嫌味を言うかのようにニタニタしながら羽島を見る。

羽島もこれにはあきれて溜息しか返さなかった。

最悪…いや、最高の一年だった…というべきだろうか。

こんな世界に生きていても悪くないそう感じたのはいつぶりだろうか。

そんなつことを考えながら年を越すのを月を見ながら待つ羽島の麟に麟が座る。

「何しけた顔をしているんじゃ、人生は長いもんじゃ。そんな顔していると鬼に笑われるんじゃぞ？」

羽島は、ツふ、と笑い。

「鬼の麟が言うと言得力がないね〜」

麟は顔を少し赤く染めて。

「う、うるさいのお！わしはもう寝る！」

そう麟はいい洞窟の奥へと消えていく。

そしてちょうど年が明けた。

「あけましておめでどう…麟」

そう羽島は言い狐の姿になる。

そんな月明かりに照らされる羽島の狐の姿は幻想のようにも見え
た。

第十五話 「羽島の一人旅が始まるらしいのだが…」

麟と羽島が共に洞窟に過ごし半年が過ぎ。

季節はもう春が来た。山いっぱい咲く桜が口から綺麗だなんて言う言葉じゃ表せないくらいに一面に咲き乱れている。

「あくあ、これから先に生れてくるの日本人はどれだけの環境破壊を繰り返してきたのだろうか」

すると、隣で麟は。

「なんじゃ？カンキョーなんちゃらとは？」

羽島は少し微笑みながら。

「いや、何でもないよ」

麟も羽島に微笑み返すように明るい見た目相応の笑顔を見せながら。

「そうか…」

この半年間、羽島は能力の練習をしてきたわけだが…まだ不十分といるところがあるらしい。

すると羽島は突然。

「あ、そういえば麟、僕、明日から旅に出ようと思うんだ」

え?!、と言わんばかりの声で。

「な、な、なんじゃと?!」

麟は少し慌てた声で羽島に言った。

「どうしてじゃ?!」

羽島は、なぜ麟はそこまで慌てているのかが分からなかった。だが理由はすぐに分かった。

「今日から僕の飯は誰が用意するのじゃ?!」

—おい…!

羽島は心の中で若干の怒りを覚えつつ話を続ける。

「少し行きたいところがあつてね」

麟は喉を唸らせながら少し考え込む。

「なら、しょうがないのお」

え?、と羽島は内心驚いていた。

そんな、羽島を麟は見て溜息を空き吐きながら言う。

「じゃから、〃しようがないのお」といったではないか」

羽島は全力で止められるかと思っていたのだが。

「じゃが、羽島が旅立つ今日はめでたい日じゃ」

—まさか

羽島は心の中でこの後の麟の言うことが予想できていた。

「ということはじゃ！今日の朝飯は豪華なものにせんといかんのお？」

—やはり、麟の頭の中は食べ物でいっぱいらしい

そんなこんなで朝食をとり出発の時が来た。

桜が咲き乱れる山の頂上で二人は向かい合う。

「また、会えるんじゃよな？」

そんな、寂しい気持ちを心に感じながら羽島は言う。

「もちろん！また、おいしいごちそうを作るよ！」

すると、その瞬間。

桜吹雪が舞い。

羽島が気づいた時には。

—え？

麟の小さい唇が羽島の右の頬に当たっていた。

羽島は今の自分に何が起きているのかが分からなかった。

そして、麟は少し顔を赤くしながら、羽島をまっすぐに見て言った。

「少しは察すのじゃ。阿呆う…」

そんな羽島も今ようやく麟が自分に何をしたのかに気づき恥ずかしくなり目をそらしそうになる。

麟は目に涙を浮かべながら羽島に言う。

「儂は此処で待ってるぞ、何百年、何千年でもお主がここに来る時を待って。お主の好敵手（ライバル）としてな」

「ああ！また、ここで！」

二人はそんな言葉だけを交わし。

羽島は旅の一步を踏み出す。

そんな羽島の後姿をしっかりと見届ける麟。

本当の二人の旅は此処から始まるのかもしれない。

そして、桜吹雪が舞い。麟の視界から羽島が消えた。

「あくあ……こんな別れ方を父さんと母さんと出来ていたらどれだけ……」

そんな羽島の言葉は誰に届くわけでもなく、ただ空を見上げ悲観するのであった。

第十六話 「羽島が自分の能力を使うそうです！」

麟と別れてから数日が経ったわけだが。

羽島には最近困ったことがある。

それは…

「うん。食料はあっても…ありすぎたら持つの大変だよね！」

まさに、羽島が口に出した通りのことが今起きているわけなのだが…

「そういうえば…僕の能力の一つ「ありとあらゆるものを具現化する程度の能力」を使えば…」

そう、羽島が今考えていることを直訳するならば、荷物持ち的な存在を架空のものから具現化しこの世に固定するというものだった。

「物は試しだよね」

そして羽島は大きく深呼吸をして…

『守護者作成。九尾の妖怪。応答…』

羽島を中心に小さな陣が地面に現れる。

『応答完了。創造完了。召喚展開』

すると、陣の中から羽島と同年代だろうか17くらいの九本の尻尾と獣耳が生えた女の子が現れた。

すると、その女の子は…

「ご主人様…何なりとご命令を」

羽島の目の前で膝をつき忠誠を示しだったのである。

この対応にはさすがに羽島も驚いたらしく反応に困る。

「ま、まあ！そんな！頭を上げてよ！」

すると、女の子は。

「っは！ありがとうございます」

まるで忠犬のように指示？されることに返事をする。

（な、なんとかこの場を…あ！）

「き、君…名前は？」

すると、女の子は困ったような顔をして考え込む。

—もしや

「名前はなかったりする?」

女の子は申し訳なさそうな顔で羽島を見て言う。

「大変申し訳ありません。私のようなものに名を持つ資格など…」

羽島は、そゆことなら。といい。

「そうだ、僕が名前を付けるつてのは大丈夫なのかな?」

女の子は少し困った顔をしすぐに返答する。

「ご主人様からいただく名なら是非に」

それなら、と羽島は考え込み。

―数分考えた末

「〔彩花へサイカ〕なんてのはどうかな?」

「サイカですか?」

すると、女の子は少しうれしそうに尻尾を振りながらこちらを見る。

「そう、簡単に言えば…そうだね、花のような美しい女性。のような意味が込められているね」

すると、彩花は顔を赤く染め。

「わ、私が、美しいですか…!」

―ん?どうしたんだろう?

なぜ、彩花が恥ずかしがっているのかも知りもせずに本来の話に戻る。

「彩花、早速で悪いんだけど。荷物を持つのを少し手伝ってほしいんだ」

すると、先ほどよりも生き生きとした声で。

「はい!わかりました!」

そして、夕暮れ。羽島は自身の能力でテントを具現化し山の中で寝泊まりをすることになった。

羽島がいつも通り料理の準備をしていると。

「ご主人様!いけません!料理であれば私のご用意いたします!」

流星に荷物持ちまでさせてここまでさせるというのに羽島は少し罪悪感を感じ、大丈夫とは言ったものの。それでもダメです、と念を押され。その後も交渉し二人で作ることになった。

第十七話 「羽島のチート能力とは一体…」

とある朝食にて。

「そういえば彩花は能力ってあるの?」

すると、彩花はポカンとした顔で。

「あ、最初の僕と一緒にだ。」

「えっとね、能力ってのは…」

朝食はいつも20分ぐらいで終わるのだが、能力の説明もあったせいか30分も時間を取ってしまった。

「なるほど、申し訳ありません。私にはそのような力はございません」
なら、と言わんばかりに羽島は…

「僕の二つ目の能力【能力を与える程度の能力】を使えば…」

「ねえ、彩花ちよつとこっちに来てくれる?」

彩花は、分かりました。と言い羽島のもとへ向かう。

「ちよつとごめんね」

そっくり羽島は彩花の頭にポンつと左手を乗せ。

『能力付与：武器を想像する程度の能力』

すると、彩花の頭にのせている手が光だし彩花を包み込む。

光が晴れると特に何も変わらない彩花がそこにいた。

「ど、どうかな?」

彩花は、自分の体を見渡しているが特に何もなさそうな顔をしていた。

「と、特に何もありませんが…」

「ん? もしや…」

「ねえ、彩花君よ。なんでもいいんだが…そうだ、刀を自分自身が手に持っているところを想像してくれないかね?」

少し困った顔で彩花は。

「分かりました」

羽島の予想は的中していた…

彩花の右手に桜柄の刀が突然出現したのだ。

「成功だよ彩花!」

彩花は少しうれしそうな顔で。

「やはり、ご主人様は凄いです」

―昼手前

「そろそろ移動しようか」

羽島はそう言い。能力で地図を作製した。

「次はどちらへ？」

羽島は地図を見る。

「そうだなあ。ここから歩いて5時間のところに村があるからそこに行こうか」

彩花は、はい。とだけを言いつつものように羽島の後ろについて行く。

―その道中。

「ご主人様、少々お尋ねしたいことが」

羽島は、どうしたの？。と返す。

「ご主人様は最近、寝言で『かれーがたべたい』と申しておられたのですが、かれーとは何でしょうか？」

寝言を聞かれていた、いや言っていたということに羽島は少々赤面しつつ返答する。

「ええ…っと、カレーっていうのは料理名なんだけど、最近は食べてないからかなあ」

すると、彩花は。

「それは…私にもお作りすることができるものですか？」

「ま、まあ…特に難しくはないけど。ただ、材料が無いんだよね」

少し残念そうにしている彩花が、そこにはいた。

「あ、そうだ。流石に人里に着いたら、そのお…ご主人様はやめてね。流石に恥ずかしいからさ」

「ではなんと呼びすれば…？」

そうだなあ。と頭を働かせること数秒。

「普通に羽島で良いよ」

「そ、そんな…！恐れ多い！そんな無礼なことなど！」

この子…結構頭が固い子だ…。

人里にいるときだけ、というのを条件この話は終わった。

第十八話 「羽島と従者の…ふあ!?!な状況について」

朝が来た…

来たのはいいのだがこの状況は…

「おはようございます。『羽島様』」

「…うん。おはよ…で、そのお…この状況は？」

羽島は、彩花にそう問いかけると。

「この状況は？と、言われましても…私はただ、羽島様を起こしに来ただけですが…」

(起こしに来るだけで男の股にまたがる少女がどこにいるんだ…)

などと、羽島は心の中で思いつつ。彩花に言う。

「そ、そうか…それはそれとして、そろそろ降りてくれないかな？」

彩花は、少しムツとした顔で不満そうにしながらゆっくりと降りる。

「分かりました…」

—朝食にて

「では、羽島様今日中に人里を目指す形ですか？」

羽島は桜の咲く木の下でお茶?の様なものを飲みながら答える。

「そうだね、お昼頃には着くはずだよ」

彩花は、使い終わった食器を妖術で水を作り出しお湯に変え皿を洗いながら言った。

「分かりました。では、私は食器の片づけが終わり次第、出発の準備に入らせていただきます」

羽島は、了解。と言い自分の準備に取り掛かる。

「まずは…ここらの地形が分かる地図を創造してつと、それから…」

そんなこんなで、あれやこれやと十五分ほど時間をかけて準備をしているうちに、準備を済ませていた彩花が羽島を呼ぶが…

「羽島様…」

どうやら、羽島は準備にまだ時間をかけているようで集中しているせいなのか彩花の声がどうやら羽島の耳には届いてないらしい…

そこで、彩花はさつきよりも大声で。

「はっ、しっ、まっ、っ様ぁ!」

そんな、彩花の大きな声でやっとなり、羽島は自分が呼ばれていると認識し彩花の方を見る。

だが、羽島が振り向いた先には…

「羽島様・・・? 私、さつきも呼びましたよ、ね?」

冷めた目で羽島を見る彩花がすぐそこに居た。

だが…皆よ察してほしい…

この男。羽島は鈍感だ。

そんな、彩花の気持ちにこの男が気付くわけもなく…。

「どうしたの?」

其の瞬間、彩花の中で何かが切れる音がした。

「はぁしいいまぁあさまぁあ?」

そして、羽島は。

「ん?」

其の瞬間。

誰かの悲鳴のような声が無処までも響いたのは気のせいだと思いたいが。

—人里が見えた頃

「そういえば彩花、君はこの世界についてどれ暮らしの事を知っているの?」

彩花は少し困ったような顔で。

「申し訳ありません。私はこの世界については何も存じておりません」

そういうことならと。羽島はこの世界の知っていることの全てを彩花に説明した。

「なるほど…」

そんなこんなで人里に着いたのだが…

何だろわか様子がおかしい…。

この人里でこれから起こることを羽島と彩花は知る由もなかった。

諏訪大戦の予兆

第十九話 「羽島が幼女？に会いに行くらしいですよ」

羽島は人里に向かっていた。というのは知っていることだろう。

それは、いいのだ。いいのだが。

人里が妙に騒がしかった。

「彩花、どうしてこんなに慌ただしいのかを人里の人たちに聞いといてくれ、あと、尻尾とかは隠すように」

彩花は、わかりました。と言い尻尾と耳を隠し羽島より先に人里に入った。

「さて、僕も行くとするかな」

羽島もゆつくりと人里の中へと足を進める。

羽島が人里を歩いていると。

おいしそうな団子のおいが羽島の食欲を誘う。

(すこし、なら…ね)

ゆつくりと団子屋の店に近づき店の前の長椅子に腰かけ、すいませーん！。と呼んでみる。

すると、中からはーい。という言葉とともに若い女性が出てきた。

「すいません。団子を三つほど」

そう羽島が言う。若い女性は、ちよつと待っててくださいね。と

言い店の奥に行ってしまった。

そして、数分後に。

「はい、お待ちせー！団子が三つですね。では、ごゆつくり」

ゆつくりと団子を食べながら山の桜を眺めていると。

「こほん」

と、咳払いをする彩花が目の前に立っている件について。

「羽島さま、ん…私が情報収集しているうちに何をしておられたのですか？」

羽島は当たり前のように。

「ん？団子だよ？」

そんな中、彩花の顔がだんだんと冷めてくる。
すると、羽島は。

「良ければ、僕の食べる?」

と、羽島は一口だけ食べた団子を彩花に渡す。

ああ、どうして彼（羽島）は、ここまで鈍感なのだろうか。

すると、急に彩花の顔が赤くなり…

「な、何を?!…いやでも…」

急に、彩花は考え事をしだし、っは!。ツとした顔で。

「も、もらつておきます!」

羽島は、なぜ若干の間があつたのだろうかと思いつつ。羽島は団子を渡し本来の目的を聞く。

「そういえば、何か分かった?」

うれしそうな顔で団子を頬張りながら話すべきことを思い出したのか、急いで飲み込み話を戻す。

「は、はい。話を聞くとところによると此処の里の神と、別の里の神との戦いが近ごろあるらしいんですよ」

「ふむふむ、それでそれで…」

「それと、別の里の神が、どうやら『戦いの神』らしいんですよ。それで、こちらが負けるのではないかと里の人々が心配しているらしいんです」

成る程。と羽島は納得したらしく…

そして、羽島は…

「ねえ、彩花さん。さん。この戦いとやらに参加してみないか?」

少し不満げな声で彩花は。

「私は大丈夫ですけど…」

彩花は羽島を心配してくれているのであろう、流石に羽島もこれには気付いたらしく。

「大丈夫だよ。僕は何たつて君のご主人だよ?」

「失言でした。失礼いたしました」

「じゃあ、その神様がいるところはある程度目星はついているから、行こうか」

そう羽島は言う。立ち上がり目星がついている場所へと向かう。何故目星がついたかという、羽島はそもそも「妖力」、「霊力」、「魔力」はもちろん「神力」の力でさえも見えるようになっていた。其の力は、この里を包んでおり、とある小さな山から流れていたからである。

力の源に向っていくと。

参道が見えてきた。

「羽島さ、ん。これは当たり前ですね」

彩花の羽島に対する、さん付けにはどうやらまだ、抵抗があるらしい。

「そうだねえ」

参道を十分ほど進んだ先に鳥居が見えてきた。

「どうやら、個々の神様は立派なお社を持っているらしいね」

鳥居をくぐると大きな神社が目の前に建ててあった。

すると、神社の中から。

小さな少女？のような子供が出で来た。

「君たちは、何者だい？」

小さな少女は、小さな笑みを浮かべながらこちらを見てそう言った。

第二十話 「羽島が可愛い幼女? (神) と戦うらしいのだが…」

で、始まって早々にこういうことを言うのもなんだが…

「子供だね」

そう羽島が言うと続いて彩花も。

「子供ですね」

そう、羽島達の目の前に立っているのは身長が140あるかないかぐらいの子供が目の前に立っていたのだから。

「子供って言うなあ!」

羽島達は口をそろえて。

「子供 (ですねえ) だなあ…」

そして、その子供 (笑) は此方を睨み…

「君ら…もしかして、大和の国の偵察兵か?! なら…!」

もしかして…。などと二人は若干察してはいた…この後にくるセリフを。

「ちよ…」

そんな、羽島が止めようとする声さえも遮られ。

「我が名は、諏訪子 (すわこ) っ! 君らをここで消し炭にさせていたたくよ!」

此処で羽島と彩花は二人で、ぶこによぶこによと諏訪子に聞こえないように相談をする。

「羽島様…ここは私が…」

「大丈夫? もし、あれだったら僕が…」

「いえ、このような場で主に任せるなど、一生の恥です。ここは私が行かせてもらいます」

「気を付けてね」

そんな、羽島の言葉に少し彩花は顔を赤らめながら。

「も、もちろんです」

すると、諏訪子は。

「先手必勝だよ！」

『手長足長さま』

「これは…弾幕？」

「彩花あ…それに当たらないように気を付けてねえ！」

彩花は、わかりました。と言い術を解き。本来の狐の妖怪の姿になる。

そして、何事もなかったかのような顔で弾幕の隙間を針に糸を通すような器用さで避ける。

すると、諏訪子は驚いたような顔で。

「き、君…まさか、大妖怪級の…大和の神はこんな妖怪まで仲間…！」

（うん。すつごく大きな勘違いしてるこの子…）

「では、次はこちらから全力で排除に努めさせていただきます」（おいおい…排除って…こあい）

そんなことを思いながら。羽島はのんびり炭酸（グレープ味）を創造し飲みながら。目の前の、光景を眺めていた。

『乱舞静（らんぶじょう）』

彩花の手に刀が創造され。

刀から花吹雪が舞う。と、その瞬間彩花が刀を軽く一振りしただけで、大きな風が花吹雪とともに諏訪子に襲い掛かる。

「っく！まだまだこれからだよ！」

どうやら、彩花の攻撃は諏訪子がぎりぎりのところで回避したらしく頬をかすめただけで済んだみたいだ。

「っち、かすり傷ですか…」

「じゃあ、いっくよ！」

『宝永四年の赤蛙』

だが、彩花は相手の攻撃を避ける姿勢ではなく。攻撃に転じる姿勢をとる。

『永久零覇（えいきゅうれいは）』

其の瞬間、彩花を取り巻く半径30メートルの範囲の時間がゆっくりとなる。

「な?!!」

諏訪子が築いた時にはもう、彩花の持つ刀の刃が諏訪子の喉元に突き立てられていた。

そこに、一人の少女が現れ…なぜかその場で倒れた。

第二十一話 「羽島と諏訪子と参拝客と…」

この状況をなんて説明すればいいのだろう。
今起きているこの状況を簡単に説明するならば。

少女（神様）の首に刀を突き付けている女性と。その場に偶然にも居合わせその場で倒れた、少女その2とその光景を。絶望したかのような顔で見つめる少年がそこにはいた。

何とも言えないこの状況を打破したのは、羽島だった。

「あ、あのお…そもそも、諏訪子さんだっけか？」

諏訪子は羽島を見て。なんだい？。と言った。

「そもそも…僕ら他国の密偵とかじゃないからね？ただの参拝者だよ。」

すると、諏訪子は先程までの態度とは違い、羽島達のことやっと理解してくれたのか、少し困惑しながらも問いかけてくる。

「本当に君たちは他国の密偵とかじゃないんだよね？」

もちろん。と羽島は答える。

諏訪子は、安心したのか大きなため息をついてその場に座り込んでしまった。

「私、君たちが本当に他国の密偵かなんかだと思ひ込んでいたよ。悪かったね」

彩花は、え？。という顔をしていた、どうやらこの状況の整理ができていないようだった。

「羽島様…これは、終わりということでしょうか？」
「うん」

羽島がそういうと彩花は、武装解除といいその一言で彩花の右手にあった刀が消えた。

（便利だね…その能力…）

作者曰く。与えたのはお前なんだが…

すると、羽島は…

「えつと…で、そこに倒れている少女は…？」

諏訪子は。

「あ、忘れてた」

(おい、良く困難で神が務まるよな)

そんなこんなで、少女を神社のお社まで運び少女の目が覚めるまで僕らについての簡単な説明を入れた。

その話の中の途中で諏訪子が驚いた顔で羽島に問いかけてくる。

「え!?!ってことは君がこの世界を創造したっていう。あの『始神核』!?!」

「え?何、僕有名なの?」

羽島はそう言うと言つて諏訪子は驚いた顔で。

「君は、いや羽島は何の自覚もなしに旅なんかしているのかい!?!」

羽島は、ここまで神であるという自覚、いや、意識をしてなかった
ので今日の今まで考えたこともなかった。

「いや、まあ。うん」

だが、これなら。と言わんばかりの勝ち誇った顔で諏訪子は羽島に提案を持ち掛ける。

「羽島達に、諏訪子。いや神としてその最上位に君臨する『始神核』様
にお願いがあります!どうか、この場をお助けください!」

突然諏訪子は土下座をしたので羽島は驚き、だが諏訪子が頭を下げ
てまで助けがほしい理由は羽島も彩花もある程度は分かっていた。

面倒ごとには関わりたくはない性格の羽島だが…

「分かったよ」

彩花は驚いた顔で。

「よ、よろしいのですか?」

羽島は、迷いのない顔で。

「もちろん」

そんな、羽島の了承を得た諏訪子は若干泣き目になり、ありがとう。
と、言い頭を上げた。

そして、気絶してしまっている少女だが…まだ、気絶なう。

第二十二話「気絶なうの少女は目を覚ますそうなのだが…」

羽島は結局諏訪子とは和解はできたのだが…

何といたしますか…そんな和解された三人の隣でなお気絶している少女がいるのだが…

「この子…どうする?」

そう羽島が聞くと。

答えたのは彩花だった。

「今すぐ起こしましょう」

え…?あの、彩花さん…刀持つところじゃないよね?

すると、諏訪子がそれならと。

大声で叫ぼうとしていたので。

羽島は間に入って二人を止める。

「どうしましょうか…」

そんな三人の騒いでいる声が耳に入ったのか目を覚ました。

「あ…ううん…ここ、ここは?」

「ここは、神社の中だよ」

そう、羽島が言うとその少女は。

「あ、」

少女を含まない三人は口をそろえて。

「「あ…?」「」」

そして少女は…

「あーっ!!貴女方、この里の神様に向ってなんて無礼を働いているのですか!!」

あー、うん。すごい誤解されている。

そんな、苦い顔をしている羽島を見てフオローに入る彩花。

「いえ、これには事情がありました…」

そんな彩花の声も今の少女にはどうやら届かないようで…

「貴方たち!今すぐ死んだ方がいいですよ!!」

そ、そこまで…

羽島は困った顔で諏訪子を見る。

そんな羽島の困ったよ、露言う顔を向けられた諏訪子はそんな三人の間に立って。

「ねえ…なんとというか…：…そ、そう！この人たちは僕の友達なんだよ！」

おーい。なんとというかの後、間空いちやってるよー！

そして少女は。

「そうなんですか!?!」

信じるのはやつ!!

なに、え、僕と彩花は信用されていない感じですか…：ほー…

彩花は此処だといわんばかりに諏訪湖に便乗。

「そういうことです」

彩花さん？若干貴方、今諏訪子から目をそらしたよね？ねえ、何で？

すると、その少女は羽島と彩花を見て。

「なんか…その、勘違いをしてすみませんでした!!」

うん。謝りたいのは僕なんだよね…：明かあんな状況を見せられたら誰だって勘違いはするよ…：なんか、ごめんよ。

羽島は、心の中でこんなことを思いつつ気まずい顔で下を向く。

「そういうことなんだ、こっちもごめんよ」

そう、諏訪子が謝罪する。

「いえいえ、とんでもないです！」

そんな、会話をしているうちに日が落ち始めていた。すると、その場に少女は立ち上がり。

「私はこのあたりで失礼しますね」

「帰り道、気を付けてね」

あ、という声を出し少女はこっちに振り向き。

「私の名前言ってませんでしたね。私の名前、『月代（つきよ）』って言います、それでは！」

そういい、月代は鳥居をくぐり石の階段をゆっくり降りて行った。

すると、突然諏訪子が立ち上がり、羽島を見て。

「今日は宴と行こうかい！」

この日、羽島は人生初お酒を口にしたのだが…

羽島はどうやらお酒が通常の人より何倍も弱いらしく。

200のコップ一杯の量を飲んだところで倒れてしまった。

だが、彩花は一人で羽島が倒れている隣で一升瓶を10本以上飲ん

でいたそうだが…

触れないでおこう。

第二十三話 「羽島と招待状と…」

全く昨日のことを覚えていない。

それが羽島の今の状況だろう。

理由は昨日のことだった。

昨日、月代が帰ってからのことだった。

—昨日の夕刻

「今日は宴と行こうかい！」

という諏訪子に対して羽島は。

「宴って？」

「宴は宴だよ！ぱあーつとお酒を飲みながらどんちゃん騒ぎをするのさー！」

羽島は少し控えめな声で。

「お、お酒は…」

そんな弱気な声を出す羽島に対して彩花は。

「羽島様はお酒が苦手なのですか？」

「いや、苦手と言いますか…飲んだことが無いんだよ…」

だったら…。と二人は口をそろえて…一升瓶とコップを両手に…

そのあとのことは、前回の話で察してほしい…

—そして現在

羽島の目の前にはお酒を夜遅くまで飲んで床に倒れている二人がそこにはいた。

「はあ…起こすべき…なのかな…」

そう言いながら、耳をぴくぴくさせながら寝ている彩花の耳をつついていると。

「んん…」

といううめき声をあげて目を覚ます。

「は、羽島…様、？」

数秒、彩花の動きが固まり突然。

「は、羽島様!!申し訳ありませんでした!!昨日はあのよう…」

「いや、もう大丈夫だよ」

「そんな訳には…」

この子は忠義。という単語そのものでできているのかな…はは…
そんな説得？をしている間に諏訪子が起きた。

「なんだい…うるさいよ…寝れないじゃないか」

寝れないじゃない…朝なんだよ…太陽の位置的にもう昼になる手
前だが…

そんな時だった…

羽島の耳が不意に風を切る音を拾った。

そちらの方を見た瞬間。

頬を何かがかすめた。

そして、何か木ノ柱に刺さった音がお社に響く。

羽島がそちらを見ると矢が刺さっていた。よく見るとその先に紙
が結ばれてあった。

それを諏訪子が恐る恐る矢を抜き結んであった紙をほどき紙に目
を通すと。

諏訪子の顔色が一瞬で変わった…

そんな諏訪子を見た羽島は。

「何が書いてあったの？」

と聞いたところ諏訪子はこういう。

「明日の正午、貴殿らの里を支配しに行く、妖怪平原にて待つ。だって
や…」

文章能力だよな…もつと、きちんとした文章で書いて送って来いよ
…

それと、妖怪平原に来て…こつちが逆に来てよなんだが…なぜ
僕がわざわざ招かれないといけないんだか…

「ま、まあ…行くしかないんじゃないかな？」

「そうだけど…私たち三人で勝てるのかい？」

待って、今この子三人って…

「三人…？」

「そりゃあそうさ。この里の人を巻き込むわけにはいかないからね」

あ、いや、うん。

「それで…敵の数は？」

「五万はくだらないと思う…」

ほ、ほおく…この子はたった三人で五万人の軍勢に突っ込めと…

だが、羽島は断れなかつた…いや、もう断れないのだ一度助けるといった以上助けるのが人間…いや、この世界の創造者としての意地だからだ。

ま、そんなことで明日に備えるか…

「どうなるんだか…」

若干この場で空気扱いされている彩花は涙目で二人のやり取りを見ているのは気のせいだと思いたい。

第二十四話 「羽島と決戦前夜」

敵さんからお手紙が来てから一時間ぐらいだろうか…いや、実際はそんなには経っていないだろう。

羽島、彩花と諏訪子は今、自分たちができることは何かと必死に考えているのである。

いわゆる作戦会議だ。どうにもならないことをどうにかしようともがき苦しんでる最中だ。

会議が始まった瞬間には互いに意見を言い合っていたのだが、あれだところだ、こうだとああなるなどと、批判しているうちに意見という意見が上がらなくなった。

今この場で発言したがる人はいないだろうというほど緊迫した空気の中に三人はいるのだ。

だがこの緊迫した空気を和ませる。いや、全員が納得できる意見がない限りこの場は進まないだろう。

数分の沈黙の末、羽島がようやく口を開く。

「僕に一つ考えがある」

諏訪子は羽島を見て頷く。

「僕の考えなんだけど…」

簡単には揺動作戦なんだ。

詳しく説明すると、まず敵は君を狙うのは明らかなんだよね。

でも、その敵さんは第二者の存在までしか考慮していないはずだよ。

なら本来なら第二者として僕と彩花が加わるところを。第三者として第二者の援軍に回れば敵も動揺する。

で、ここからが本題なんだけどね…」

羽島の作戦はほとんど完璧というほど繊細に組まれていた。

まるで予め用意されていた戦略ゲーの盤面を読むかのように。

羽島の説明は三十分で終わった。

「では、この話は作戦当日までこの話は厳禁だよお。敵にこちらに

内通者とかいたら困るからね」

諏訪子はゆっくり頷く。

彩花も諏訪子に合わせるように頷く。

羽島は諏訪子に許可を得てお社の敷地内に小さな小屋を創造した。

羽島はその中に入るなりとあるものの準備を始めた。

「創造：式神符」

すると目の前に小さな札が現れた。

羽島はこれをひたすら想像して作り続けた。

その間、彩花は外で刀の鍛錬を、諏訪子はひたすら術の強化をしていた。

――三時間後

もう日が暮れてきたころだろうか。刀の鍛錬をしていた彩花もそろそろ時間だと思い羽島を呼びに行く。

「羽島様、そろそろお時間です」

彩花が突然話しかけてきたせいも、少しびっぴりしたかのように彩花を見て。

「分かった、今行くよ」

彩花は一礼して小屋を後にする。

「はあー…完成したのが九万枚か、悪くない数だね」

そう羽島は言うゆつくりと立ち上がり諏訪子や彩花のもとへ歩きます。

「待たせたね…じゃあ、明日に備えて今日は休むかあ」

すると二人は口をそろえて。

「いえ？」

正直休みたい理由は鍛錬とか面倒だから…というのが主な理由だ。

羽島は自分のためなら大抵努力はするが、他人となると…どうにもやる気を見せないたちなのである。

羽島はそれを悟らせないように。

「いやー、うん。疲れてから明日の戦いに挑むのはあれでしょ？だから、今日は早めに休んで万全を期して敵を打つ。これも作戦のうちだと思っただよ…ね？」

すると二人は。

「それなら(そういうことでしたら)」

と口をそろえて言った。

羽島は心の中でこの子たち案外ちよろすぎる…

逆の意味で羽島は心配になった。

「じゃあ…どこの神様だかしらないけど…僕の休日返してもらおうよ…」

そんな誰にも聞こえないような声で遠くを見てそんなことをつぶやく羽島がいたというのは気のせいだろう。

第二十五話 「羽島の秘策」

ついに決戦の日が来た。そんな緊張しっぱなしの朝に三人は決意を固めた。

「よし行きますか…」

そう羽島が言うと二人は静かに頷く。

「諏訪子、妖怪平原の場所を強く想像して」

「分かったよ…」

羽島が今からしようとしているのは転移魔法である。

だが羽島の転移魔法は一度行ったところしか行けなく、なので諏訪子の記憶を借りて転移しようという算段だ。

羽島は自分を中心に半径一メートル程度の陣を作る。

「二人ともここに入って」

彩花と諏訪子は陣の中にゆっくりと入り。

「準備はできて（います）るよ」

と口をそろえて彩花と諏訪子は言った。

「じゃあ行こうか…」

すると陣が光だし三人は一瞬にして陣の中から消えた。

三人が目を開けると平原に出ていた。

「諏訪子、ここで良いんだよね？」

諏訪子は頷きながら。

「間違いないよ」

羽島は目の前の光景を見てこう言った。

「そのようだね…」

羽島の目の前には何万という妖怪、人の軍勢がいたのである。

「ここまでは予想通り、んじゃあ…始めるよ」

素晴らしい羽島は五万という刀や弓を持った人型の式神を諏訪子の後ろに配置して、彩花と共にその場から消えた。

「ここからは、私の番ってわけだね」

そういうと諏訪子は右手を天にかざし…

「進め！」

その声の合図とともに前に振り下ろした。

諏訪子の合図により式神たちが一斉に奇襲を開始する。

そして羽島と彩花は敵から二キロ離れた右側面に回り、待機しているところだった。

「第一作戦 正面からの奇襲…成功かな」

「そうですね」

敵は奇襲され慌てている。

だが直ぐに体制を整えられた。

「この統率力…後ろに有能な指揮官がいるね」

すると彩花は。

「私が排除してきましょうか？」

「いや、大丈夫だよ」

敵の指揮官を目で追い探している…

「明らかあれだよ」

と羽島の指さす方向を見て彩花も。

「あれですね」

羽島と彩花が見たものとは自らの軍の先頭をずかずかと走る女性の姿だった。

羽島はこの時、女とは怖いなど改めて思った。

そういつている間に諏訪子の軍と敵の軍の先頭集団がぶつかった。

「じゃあ…僕らは二人で敵さんの横っ腹たたつきりに行きますか」

「承知しました」

羽島と彩花は音速で二キロもあったであろう距離を一瞬で詰め寄り。

【夜天光：夜天象】

【鏡吹雪：銀照切（ぎんしょうせつ）】

羽島は死の光を…

彩花は自らの刀を複製しそれを天から雨のように降り注がせた。すると敵の大將に羽島達の存在が伝わる。

「神奈子様！右翼より敵襲！敵増援です!!」

「なんだいそりゃ!?!」

すると神奈子の前に諏訪子が現れる。

「君だね! 私たちの里は渡さないよ!!」

一瞬の出来事だった。神奈子がよそ見をしている隙に諏訪子が先手必勝と言わんばかりに自分の大技をぶつけようとした。

その時…

「なんだい? お前さんは」

神奈子のただのパンチでどこか遠くへ飛ばされてしまった…

偶然その光景を後ろで見ていた羽島は… 釈然としていた。

第二十六話 「羽島と神奈子の一騎打!」

今僕の目の前で何が起こったことを簡単に話すのであれば諏訪子が敵の大將に奇襲で殴り掛かって、相手に返り討ちにされて遠くに飛ばされていった、というところだ。

此処で僕の判断が煽られるわけなんだが…正直何をすればいいのかと言われたら…

怠慢ですよね…

あいにく敵の名前は聞こえてたからね。

「神奈子さんどうも」

神奈子は羽島が冗談を言っていないのを確信し問いかける。

「敵の大將がこんなところに居ていいのかい？」

「さあ、けど君らにやられるような柔な大將じゃアないからねえ」

「貴様、口だけは達者だな…!」

掛かった。

「なら、この口を黙らせてくれよ」

「いいよ!その口もう二度と開かないようにしてくれる!」

あーはい。単純だな、この人…

神奈子は挑発されるがまま正面から木の柱を飛ばしてきた。

「つと、これで終わりかな?」

あつさり回避られ神奈子は若干ではあったが驚きを隠せていなかった。

「っク!まだまだっ!」

五本の木の柱が羽島を囲むように地面から突き出てきた。

「へえ、面白い技を使うね」

神奈子は怪しい笑みを羽島に向ける。

「油断をしたら痛い目を見るよ!」

すると羽島を囲んでいた木の柱がソフトクリームのように羽島を閉じ込めようとする。

だが羽島は動こうとしなかった。

そんな羽島の姿を見て神奈子は口が裂けんばかりの笑みを浮かべる。

「発火！」

次の瞬間、羽島を閉じ込めていた木の柱が大爆発を起こした。

「どうだい？これは効いたろう？」

土煙の中、その中心で神力の力が急上昇し始めた。

「つくーん、これは…？」

その正体は羽島だった。

羽島の手には白い光を帯びた弓と矢があった。

「その力の量は何だ!？」

神奈子の顔は徐々に引きつり始めていた。

『神弓：炎の御霊』

そこから放たれる矢は山すら平地に変えるほどの威力を有する。

「これをどうするか？」

まずい…そう、神奈子が死を感じたその時だった。

「あ、れ…？」

神奈子は傷一つなくそこに立っていた。

「交渉しないか？」

羽島の唐突な発言に神奈子は驚きつつも冷静に聞き返す。

「ど、どういうことだい？」

「僕らの大将は生憎とどっかに飛ばされてしまって…ね。そこで、無益な争いをせずに共存という手を互いに打てないかと思っただんです
がどうかな？」

(今のあたしじゃあ、あいつには勝てない…)

神奈子は少し考え込み…

「はっはっはーこりゃあ負けたねあたしらの負けだよ！」

交渉は意外にもあっさりと承諾された。

これにて諏訪大戦は終わったのであった。

終わったのはいいのだが…

「うちの大将（諏訪子）…どこまで飛ばされたのだろうか…」

第二十七話 「羽島と諏訪大戦の終結と…」

諏訪大戦が終わりようやく互いに落ち着きを取り戻したところで二者の交渉が始まった。

交渉といってもそこまで、あれやこれやとややこしいものでもなく簡潔な内容だ。

「では、これから僕の考えをやや一方的に言わせていただく…」

二人の神はこの羽島の存在が何なのかを知っていた。

いや、そもそも羽島が始神核であるということを知っていた。きまで知らなかったのである。

そのせいも、神奈子はすごくいろいろな意味で緊張していた。

その顔には、不安や後悔などの感情が入り混じったときたものだ。

羽島にも神奈子の心情はなんとなく察していた、だから、敢えて柔かな声で優しく話し始める。

「まず、今回の大戦に置いての責任者だけど…」

そんな羽島の発言に神奈子はその身を縮め下を向く。

「まあ、僕的に勝手に言わせてみればみんな無事ならそれで解決ってことで」

だがこの一瞬で神奈子と諏訪子の顔は驚きのものに変わっていた。

「それで、い、いいのかい？あ、アンタ達は？」

そう聞いたのは神奈子だった。

だが羽島は。

「そうだね、少し納得いかないところも『互いに』あるかもね」

「なら、どうしてだい？」

羽島は笑顔を作り。

「さつきも言ったけど、今回誰一人として犠牲がなかった…これ以上同行追及したところで、互いに事情があったわけだし…今回はお互い水に流すじゃあダメかな？」

すると、二人は何か吹っ切れたかのような顔をして互いに手を取り、握手を交わした。

時は数時間後…交渉はやれ解決はした。したんだが…



この状況がよくわからない…

二人の神が羽島に苗字を欲しいとあまりせがんでいた。

二人から理由を聞くと、神の中でも下位の神と上位の神があるらしく下位の神が上位の神として認められるには、上位の神から苗字を授かるか、人々から信仰を集めるの二つらしい。

神奈子が今回、諏訪子と争おうとした大きな理由はこの後者に当たるという。

で、だ。今苗字を考えている少年が神社の座敷で少女三人がいる部屋で考えている訳なんだが…これがなかなか決まらない…。

さらに時は数時間、夕日が山頂隠れる時間帯だろう。

羽島は、今か今かと心躍らせて待つ二人の神と、一人退屈そうに羽島を見つめる従者？を見る。

「はあ…決まったよー」

そう羽島が言うと二人の神は嬉しそうに目を開かせまるで子供のように顔が無邪気な笑みに変えていた。

そんな二人の顔を見て羽島は少し顔が引きつるが気にしないふりをして続けた。

「まず、諏訪子。君はこれから『洩矢（もりや） 諏訪子』と名乗るよ
うに」

そして一呼吸おいて。

「そして、神奈子、君は『八坂（やさか） 神奈子』と名乗るよ
うに？」

そんな時だった、二人の神力の流れが少し変わったのが羽島には見えていた。

それは、普段は神の体にゆっくりと流れるものなのだが、今の神奈子と諏訪子の神力の流れはいつも以上に早く、力強いものになっていた。

だが、そんな二人の神は自分の神力が増えているということにも気づいておらず、子供のよう二人で境内を走り回るのであった…。

(彩花やめて、その目怖いんだけど…)
ある一人の少女を除いて…

第二十八話 「羽島と彩花と新たな従者？」

朝になり、小鳥達が活発に泣き始める。

頭が痛い…それが今一番に羽島を襲っているものだった…。

理由は簡単だ。昨日、羽島に名前を付けてもらったということで、諏訪子が言い出しっぺで、宴会を開きたいといった。

すると、だ、そこに神奈子までが便乗してきたわけなんだが…。

正直言つて宴会が始まって五分以降の記憶がない…

始まって早々酒を飲まされた、それ以降のことが綺麗さっぱり頭の中から消えているのだ。

「う、うう…」

羽島の隣で彩花が呻き声を上げる。

彩花も昨日何かあったのだろう…いや、あつてほしくないのだが。

「はあ…外にでも行くかな」

羽島は少し重い体をゆっくりと置き上げ、外へと足を進める。

「やっぱ外は朝だと冷えるなあ〜」

そんなことを言っていると、後ろから声が聞こえてくる。

「は、羽島様…おはようございます…う…」

少し寝ぼけた声を出しながら後ろから現れたのは彩花だった。

「うん。おはよう彩花」

羽島の金色（こんじき）がかつた髪とは違い彩花の白く透き通った髪は太陽に照らされているところを見るとふと、綺麗だな、と見とれてしまう。

そんな彩花をまじまじと見る羽島の視線に彩花が気付くと少し恥ずかしそうに頬を赤らめ下を向いてしまう。

「は、羽島様…そ、その今日の…予定は…？」

そんな彼女の木など当の本人（羽島）は知ることもなく聞かれたとおりに答える。

「そうだねえ…今日は少し新たに従者を呼ぼうかなって思ってるんだ」

すると彩花は、え？という顔をするなり羽島を軽く睨む。

「女…ですか…？」

「…？まあ、誰が創造できるかなんて僕にはわからないからなあ…えっと、彩花的に女の子がいいの？」

そんな羽島の答えに顔を別の意味で赤くし頬膨らませる従者がいたのは気のせいだろう。

「い、いえ…そういう訳では…」

小さな声で発した言葉は羽島には届くわけでもなく、彩花はまた下を向いてしまった。

(女の子って…分かんないもんだね…)

日はまだ見たところ羽島の目線より少し上にあるくらいだった。

時間でいえば朝の七時だろうか。

そして羽島は能力を発動するために静かに目を閉じる。

『守護者作成。狼の妖怪。 応答…』

(なぜ狼かって？なんとなくさ…w)

すると、羽島を中心に小さな陣が現れた。

(ここまではよし…つと)

『応答完了。 創造完了。 召喚展開』

そして陣が白く光り出す。

―そして

そんな光景に彩花は中から現れた人物に驚いていた…驚いた理由は人物ではなく行動だ…黒髪の小さな女の子がなんと羽島の頬にキスをしていた…

その後…羽島はこっぴどく従者に説教を受けたらしい…

当の本人は…うん。

第二十九話 「羽島と彩花と…その他と…」

今の羽島の置かれている状況は、そう…

神社の中で、少女三人に冷たい目線を向けられ、なおかつ羽島の膝には小さな女の子が座っているという、なんとも不可思議な光景である。

「は、羽島様…？そろそろお疲れでしょう？ “ソイツ” を降ろしたほうがよろしいかと…」

彩花はこれまでに見せたことのない冷めた目で羽島に言った。

「いや、でも…さ」

「いやだあ!!離れたくないもん!」

羽島の膝に乗っている小さな子が叫ぶ。

流石の羽島とある二人の神様も答えたようで…

だが、彩花だけは “その子” と羽島を交互に睨みつけていた…。

こうなった彩花は面倒だ。それは、この場にいる羽島だけが知っていることだ。

紹介が遅れたが、この小さな子の見た目は長い黒い髪が特徴で頭には、羽島に似た獣耳がある。人の歳でいうならば10歳かそこらだろう。

そんな子が現在進行形で駄々をこね羽島から一向に離れようとなないのである。



結局、彩花をなだめるのに数時間費やしてしまった…。

彩花はある程度落ち着きを取り戻し、女の子も疲れたのか、羽島のフワフワな尻尾の中で寝てしまった。

羽島は、溜息を吐きながら天井を見る。

そして、彩花の方を見ると、彩花は少し怒っているような顔でそっぽを向く。

それを見る限りまだ怒っているらしい。

それから、羽島と彩花の中で謎の膠着（こうちやく）状態が続いた。

時間はお昼を回り、気を利かせた諏訪子と神奈子が昼食を用意してくれていた。

「ほらアンタら喧嘩してないで食べな」

そう神奈子が言うと、流石に朝から何も口にしてないせいかな、若干拗ねた様子を伺いつつ食事に手を付ける。

羽島も流石に出されたものを無視するわけにもいかず彩花の対面に座る。

羽島が食事をとっていると、ちよくちよく彩花の方から視線を感じる、のは気のせいだろうか？

食事もとり終わり、諏訪子と食べ終わった後の食器を片づけをしている時だった。

「ねえ、羽島…あんたまだ気づいてないのかい？」

そんな諏訪子の問いに羽島は首をかしげる。

「気づいてないって…？」

やはり、羽島は羽島だった。

そんな、諏訪子の助け舟？のようなものも意味をなさず、ただ、そのご飯を食べる静寂な場だけが、居心地の悪さを醸し出していた。

結局その後、羽島は諏訪子や神奈子に大まかな事情を聴かされ、彩花に何時間も夜通しで謝り倒すことになるとは、また別の話であってほしいが。



「で、この子の名前はどおするのさ…？」

そう、諏訪子は羽島に問いかける。

そんな諏訪子の問いに、羽島ははまだ膝の上に座る少女（幼女）を見る。

羽島の視線を感じたのか少女は満面の笑みで羽島の方を見た。

そんな、光景をまだ許すまじと遠くから見つめる彩花がいたのは気のせい…だと思いたい。

第三十話 「新しい従者の名前が決まったみたいですよ」

「おはよう、神奈子」

そんな挨拶から今日の一日が始まった。

「ああ、おはよう羽島」

神奈子がテーブルを挟んで羽島の対面に座る。

羽島はその場で大きなため息をつき、膝の上に寝ている女の子に目を向けた。

「なんだい、まだその子の名前を決めてなかったのかい…?」

「そんなんだよねー…」

そんなことを話していると、奥の方から諏訪子と彩花がやってきた。

「羽島様、やはりここは羽島様御自身がお名前を与えるべきかと」

そんなことを言っている彩花だが、まだ、顔を見る限り認めたくない部分もあるのだろう。

「んー、どうするかなー」

すると、諏訪子が羽島の隣に座り女の子をまじまじと見つめる。

「黒髪で…狼でしょ…なんだろうね?」

(僕はそれが知りたいんだよな…)

符と羽島の中に最初に見たこの子の眼を思い出す。

白い雪のような目。その目はどんな色にも染められることのない、純白な白。

「黒雪（くろゆき）…」

羽島は知らずと口にその名を出していた。

「アンタがそういうんなら、それでいいんじゃないかい?」

「…え? 僕なんか行ってた?」

無意識に言っていたせいかわ、当の本人（羽島）は気づいていないようだった。

それに見かねた彩花が羽島に近づき、起きているはずのない黒雪に見せつけるように、羽島の腕に抱きつく。

「羽島様…黒雪と自分で言ってたじゃないですか…」

「え…？あ、あの…彩花さん…？」

唐突なことに羽島本人も驚いているらしく、何やら膝の方に違和感を感じ目を向ければ、黒雪は彩花の方を見て…というよりは睨んでいた…。

(何この子たち…なんで睨み合ってるの?)

「羽島さまあ〜！私の名前何て言うの〜？」

「黒と書いて雪で、へ黒雪〜だよ」

すると、先ほどまでは彩花を睨んでいた顔が、一瞬で年相応の女の子の笑顔いっぱい顔になっていた。

「羽島様、少しだけその女狐を懲らしめてきててもよろしいでしょうか…？」

おーい…彩花君…顔が笑ってないよ…。

「ははは…あ、そうだ、ちよつと諏訪子と神奈子に話があるんだ」

「話って何だい」

息。ピツタリ。

「えつとね、明日僕たちは、ある場所を目指そうと思ってるんだ、あ、どこに行くかは秘密ね？」

そんな羽島の発言に、諏訪子は泣きそうな顔で、神奈子はどこか寂しげな顔で羽島を見る。

(二人とも別れを惜しんでくれるんだね…)

「まあ、そんなわけで出発は明日の早朝かな」

「そうかい…なら…」

神奈子が下を向く。

「ん…？」

そして…

「今晚は宴だー!!」

「うん知ってた…」

そんな所に若い少女の声が響く。

「えーつと、お邪魔でしたかね？」

そこに居たのは月代だった。

「ちようどよかった月代さん、今晚、この神社で宴を開くんですけど来ない?」

「はい!行きます!あ、そうだ、神奈子様、今後ともよろしく願います」

急なことに、神奈子は驚いていたが、次第に笑顔を見せ。

「ああ、こちらこそよろしくだよ!」

―敵同士だったものが、互いに手を取り合うのも悪くないかな。
今夜は忙しくなりそうだ。

キャラ紹介

冬菜月 羽島 (とうなづき はしま)

身長は、170くらいです。日本の男子高校生の平均ぐらいです。体重は、50です。設定ですが。なかなか、痩せているんじゃないでしょうか？

まず、皆さん、ここで本編で語られていない話ですが、羽島は一人暮らしです。

一人暮らしというのには理由があって、羽島が小学校に上がる頃、入学式前日に、母親を亡くしています。父親は、羽島が生まれてからすぐに交通事故で亡くなってしまいました。

この辺が、本編で語られてない羽島の過去です。

髪型はロングの清楚系の女性？を思い浮かべていただければ幸いです。

髪の色は、灰色一色。

瞳の色は夜の月のような金色。

服装は、灰色の袴。(変更します。。。)

右の方の腰に刀が一振り。鞘は日本を象徴する桜の色。

柄は、黒。

羽島の説明はこんなところです！

彩花 (さいか)

身長は、165となっております。

体重は…47です…。(正直、ここはどうするべきか迷いました。)

彩花には過去などは一切存在しません。羽島に召喚されるまで、空气中の分子のような存在でした。

髪型は、ショートボブ。

顔などは、某〇隊これくしょんという加賀を想像していただければ…ありがたいっす。

眼の色は、茶色ですね。

あ、髪の色ですが、白です。

特に武器は持ってません。戦闘時のみ能力を使って武器を創造す

るという感じですね。

性格は：性格なのかはわかりませんが、羽鳥がほかの女性と話していると嫉妬してしまう。という設定になっています。かなり面倒なキャラになってますが許して…

では、最後です。

黒雪（くろゆき）

今回の新キャラです。

身長は130ぐらいです。

体重が：32です。この身長平均体重よりは痩せている感じですね。

続いて髪の色ですが、黒です。はい、黒です。大事なことなので二回言いました。

眼の色は、黒です。はい、黒、真っ黒です。超大事なことなので三回言いました。

武器は持ってません。この子の場合魔法や妖術といった遠距離攻撃、範囲攻撃などを得意とします。

まだ、戦闘シーンがありませんが、期待しててください。

あとは、顔は：幼女です。幼い女と書いて幼女です。はい、童顔ということ。あくまで、設定です。

あ、服装は：分かってますよね？

はい黒のコートです、黒の黒、真っ黒、超真っ黒です。大事なことなので五回言わせていただきました。

では、一通り説明が終わりましたね。

キャラ紹介は以上となりますが、ご質問などがあれば、個人的にコメントや、Twitterの方にお願ひします。

Twitterは最後の方に載せておきます！

Twitterでは、自分の愚痴など日ごろの生活について書き込んでいます。

良ければフォローお待ちしております！

更新ペースは遅くて二日に一回です。

第三十一話 「羽島が不死の山目指すそうな…」

宴（お別れ会）が終わり、酔いつぶれた一同であったが、流石に羽島が旅立つということでもいつものメンバーが自然と外に集まっていた。

「ああ、諏訪子、神奈子、月代さん…僕らは此処でお別れとなります…」すると、神奈子が大きな口を開いて笑い出した。

「何言ってるんだい！あんたはそんなしんみりとした挨拶をする奴じゃあないだろうに？」

羽島の口からもいつの間にか笑みがこぼれていた。

「そうだね、んじゃあ、ちよつと行きたいところあるので行ってきます！」

そう羽島は言い、一歩ずつ次の旅へと足を進め始めた。

後ろからは、神奈子と諏訪子、月代たちの声が聞こえる。

—ああ…本当に信頼できる人って、こういうものなのかな…父さん、母さん…

神奈子、諏訪子は笑いながら。

そして、月代はその目に涙を浮かべながら、彼らを見送った。



五時間ほど歩き、山を越え平原に出たところだった。

羽島御一行は、一人の妖怪…少女？に足止めされていた。

正確には、足止めというよりは、たまたま羽島が道端で困っていた少女を見つけ話しかけてみたところ、その場で泣いてしまったのである。

ただ、その少女の姿は、見た目が12歳ぐらいなのだが、見るからに誰かに殴られた跡が顔に数か所、服装自体は紫色の和服のものが、ところどころ切れて、泥をかぶった状態だった。

「羽島様…このガキ、いかがいたしましょう？」

唐突の彩花の発言に羽島は、慌てて彩花をなだめる。

「そうだね…ねえ、君の名前は？」

「ひつく…う、ひつく…う、…」

「うっ？」

少女は、ダムが崩壊したかのように大声で、また、泣き出してしまった。

そして、何十分経っただろうか？

ようやく泣き止み落ち着きを取り戻したのか、少女は道端の木の陰で、羽島に治癒魔法をかけてもらっていた。

「それで、落ち着いたかな？」

少女は、泣いた後のせいか目がまだ赤く充血していた。

「はい…お見苦しいところすいませんでした」

そして横に控えていた黒雪が、羽島の後ろからバツ！と飛び出す。

「ねえ、貴方のお名前は何―？」

「黒雪、余り急かしちゃだめだよ？」

黒雪は、しゅんとした愛らしい表情をしながらうつむく。

そんな黒雪に羽島は右手をポンと置き、優しくなでる。

すると少女はゆっくりと口を開き。

「わ、私は低級の妖怪なので名前何て大層なものはありません…」

―この子は…多分、僕と一緒にだ…

羽島は、目の前の少女をいつの間にか過去の自分と照らし合わせていた。

どこか、似ているそんな感じがしていただけなのに。

「そうか…なら僕がつけてあげるよ？」

少女は、驚いた顔で羽島を見る。

「いや、だったかな？」

羽島がそう聞くと、少女はまた泣きそうな目を必死に堪えている。

「いえ…お願いします…！私に、名前をください…！」

羽島は、その場で空を見る。―そして。

「八雲 紫（やくも ゆかり）でどうかな？」

少女の動きが止まったことによって、羽島は変な名前を付けてしまったかとしどろもどろになってしまう。

「あ、いや、えっと…君が嫌ならいいんだよ？」

そんな、慌てる羽島を見た紫は、クスリと笑って見せる。

「フフっ…いえ、私は『八雲 紫』です！」
そんな紫の初めて見せた笑顔は、やはり幼い少女の顔をしていて、どこまでも純粋な澄み渡った顔をしていた。

第三十二話 「羽島と一緒に紫が旅をするそうです…？」

現在進行形で羽島は二人の従者から冷たい目で見られている。

露言いを話せば一言で済む話。

紫が羽島に背負ってもらっていて、じやれているのが二人の従者には気に食わないらしい。

「羽島様…」

そんな中、一人の従者「そんな中、一人の従者「彩花(さいか)」から声がかかる。

「どうしたの彩花？」

「その位置(紫)、私と交換しましょう…？」

彩花の顔は笑っていても、目だけは笑っていなかった。

黒雪は、頬をいっぱい膨らませ羽島を見ている。

そんな中、紫は自分の今のポジションが危機に晒されていることに察した。

「羽島様？紫は此処にいては駄目なのですか？」

見た目とは裏腹な上目遣いで羽島に言い寄る。

「はは…ダメではないけど…(二人の視線が痛い…)」

それならと、羽島は少し紫には離れてもらい両手を胸の手前で合わせ始める。

「十尾(じゅうび)変化」

すると羽島を中心に煙が発生する。

やがて煙が晴れるとそこに居たのは十の金色の尻尾を持った狐だった。

狐といってももはやそれは大ききの桁が違った。

ざっと見た目で判断するならば全長五メートル、高さ二メートルといったところだ。

そんな光景に三人はつい見惚れてしまっていた。

「ほら、三人とも僕の背中に乗っていいよ…?」
そこから数分間、三人は動くことはなかった。



最終的には全員羽島の背中に乗ることになり、そのおかげか羽島はなんとなく彩花と黒雪の機嫌がよくなっている気がしていた。

(女の子の考えることは分からないなあ…)

「そういえば紫ちゃん」

紫は急にちゃん付けされたことに驚く。

「ひゃ、ひゃい!?!」

「ひゃい…?ま、いいや、でね僕たちはこれから長旅が待ってるんだよ、それで—」

紫の表情が固まる。多分紫はこれ以上は連れていけないと言われてしまうと思ったのだろう。

だが羽島は…

「—一緒に来ない?」

「—へ?」

羽島はゆつくりと話し始める。

「君が妖怪なのも僕たちは知っている、もちろん僕らも妖怪だよ?」

羽島は口元を緩ませ地上から上空へと跳躍する。

「君が嫌ならいいんだ、でも紫ちゃんの力になりたい…少なくともここにいる彩花と黒雪もそう思っているよ」

紫は小さな目からいっぱいの涙が溢れそうになっていた。

「私は…私には帰る場所がありません…身寄りもありません…もし、私に帰る場所があるなら、羽島様と…いい、一緒に居たいですっ!」

羽島と彩花、黒雪はにっこりと笑い口をそろえて言った。

「二おかえり、紫(ちゃん)！」

「はい!ただいまです!」

そんな、夕焼け空での四人の光景はとてもきれいで幻想の世界を思わせるものであった。

第三十三話「羽島の旅は、いつのまにか新築の家を建てる事になっていました。」

今日（こんにち）の空は快晴に恵まれ青々と颯爽に茂った山の木々たちが、どこからか吹く風に揺られゆつくりと時間を進めている環境を作り出しています。

そんな中、羽島御一行はというと。

「師匠（せんせい）！！紫に妖術の扱いを教えてください！！」

紫と出会ってから数日、その間に紫は羽島がどのように妖力を扱っているのかに興味を持ち始めていたのだ。

いや、持つちやつたのである。

「妖力の扱いかあ…紫ちゃんはどうしてそれが知りたいの？」

妖力とは何なのか紫はそれが知りたいといった。

「私は未熟です。妖怪でありながら妖術を知らないお子様なのです。だからこそっ！師匠（せんせい）に教えていただきたいのです！」

それならと、羽島は彩花と黒雪を呼び出す。

「なんでしよう羽島様」

「なんですかあ？」

「君たちに一度僕の見ている世界を見てもらおうかなって」

三人は同時に首をかしげる。

「あー、えつと僕の左目が見ている世界と君たちが見ている世界は違うんだよ…だからそれを一時的に僕的能力で見えるようにするから」

三人はいまだに羽島の言っていることが理解できていないらしい。

三人は互いに顔を合わせ首をかしげる。

「一時的な能力付与：世界の流れを見る程度の能力」

すると突然、三人の体が光りだした。

その眩しさに三人は目を瞑る。

そして目を開けるとそこには…

「羽島様…これは一体？」

「羽島様く？このフワフワした光の線は何い？」

「師匠…これは…」

そう、三人の見ている世界はまさに、「魔力」「妖力」「霊力」「神力」の四つの力が入り混じった世界だ。

そのうちの三人にはない三つの力、「魔力」は空気中に川のように流れ、「霊力」は羽島の体を妖力の色とは違った色で体内を血液のように循環していた。

そして、羽島の周りに唯一神々しい光を放った黄金の光が数本、円を描くように回っている。

「これが、羽島様が見ておられる世界なのですか…？」

そんな彩花の問いに羽島は一言。

「そうだよ」

だが不思議な点が一つだけあった「神力」とは神である個体の中でのみ干渉する力なのだ。

それが、羽島の周りでクルクルと回り続けている。少し分かりづらいいと思うが、その力が体外にあることがおかしいのだ。

理由は、あっさりとしたものだった…

羽島自身が自らに「ありとあらゆる能力や力を制御する程度の能力」を付与したのだ。

さらに、この能力を付与した理由がもう一つあった。

それは―「妖力」と「神力」は互いに相性が悪いということだ。

それらの力は、互いに干渉しようともせずぶつかれば、そのぶつかった一部が互いに消滅してしまうという次第、これらの理由により羽島自身がこのような能力が必要になったというわけだ。

まあ、そんな話は置いておいてこれから紫の修行を引き受けるとなると、旅なんてものはしづらくなってきてしまう…

―そこで羽島は…

「ねえ、三人ともー。この辺の森に僕らの家でも建てるか…」

そんな羽島の一言に三人は…

「「えっ？」」

彼女らの一言が森に一瞬の静寂を与えた…。

第三十四話 「羽島の家はいつの間にか豪邸へと…」

今現在、羽島達は自分たちの家をどのようなものにするか考えているところだ。

「羽島様、私の意見を聞いていただけますか…?」

四人が円になって座る中、彩花が手を上げる。

「いいよー」

「ありがとうございます、では、あくまで私の意見ですが修行のためのスペースは大きく確保しておいた方がよいかと思います。…そして、羽島様にはお手数をおかけするのですが、羽島様の能力を使い、家もとい修行場所を創造するのはいかがでしょうか?」

羽島は今の彩花の意見が理に適っていることを再確認しながら周りに意見を求める。

「みんなはそれでいいかな?」

残りの二人は元気そうに答える。

「師匠とのお家なら何でも大丈夫です!」

「私は…羽島様がそう言うなら…いいよ?」

最近になって羽島は黒雪のキャラが安定しないことに困っていた、というのはいえ伏せておこう。

「羽島様…私、自分の部屋がほしいです、いいですか?」

黒雪が羽島に尋ねる。

「大丈夫だよ、ちよつと待っててね…みんなの部屋も一つはあった方がいいから…」

羽島は急に立ち上がり周りを見渡す。

「ここら辺には…小さな山があるな…そこに…」

と羽島は小さく呟いた…そして。

「転移術式展開!みんな、少しだけ移動するよー?」

「「え?」」

そんな三人の声は羽島には届くことなく転移が始まる。



初めに言おう、コレは異様な光景だ。

ある少女三人は、転移酔いによって倒れていた。

そこまでは、特に問題はなかったのだが、目を覚ましてみれば…。なんと、三人の少女の目の前には、昔の京都に住む貴族のような邸宅ができていた。ただ、その中はしっかりと今後のことも考えられていて、まず正面の門をくぐると、大きな庭が広がる。庭には鯉の池があり石畳でしっかりと道などは舗装されている。そして、邸宅の玄関をくぐると、右手にリビングがあり左には書齋が一部屋、書齋の部屋の横の廊下を通れば襖が何枚も左にも右にもある。これは個人の部屋だろう。

よく襖を見てみれば、それぞれの三人の名前が襖の真ん中の少し上に書いてあった。

そして二階へと続く階段があり、そこを上ると、開けた廊下に部屋が二部屋。

一つは羽島の部屋だろう、もう一つを開けて見てみれば、そこには三人が見たこともない黒い筒？のようなものと、刀などが置いてあり、それら一つ一つに妖力が込められていた。

問題は修行場所だが、邸宅の裏手に神力で強化した大きな道場が設けられていた。

見た目こそ一般的な和風の道場だが、その佇まいは圧巻だ。

「羽島様…これが、家もとい修行場所ですか…?」

「師匠…これは…すごいんですけど…」

「羽島様…私の部屋をくれてうれしいけど…」

こんな豪華な邸宅に住めるのに三人には不満があった。三人の不満はただ一つ…

「ん?」

「「やりすぎです (よ) 」「」」

第三十五話 「羽島はこれからみんなの修行の師匠（せんせい）です」

只今の時刻はちょうどお昼過ぎを回ったころだ。三人の少女は朝から豪邸の裏手にある道場で鍛錬をしているところだ。

まあ、鍛錬といっても道場なのであまり大きなことはできないが、自らの妖力を高めたりといった集中力を高める場として三人の少女は利用している。

で、此処の持ち主だが…現在、「普通に出かけている」。理由は、三人には話さずどこかへ行つてしまったのである。

すると、彩花が立ち上がる。

「二人とも外で空気でもすいませんか？」

彩花からの意外な誘いに黒雪と紫は驚いたが、二人ともこの修業が退屈だったため、特に断る理由はなかった。

三人は外に出て大きく息をのみ吐く。

「はあく師匠はどちらに行かれたのでしょうか…」

すると、家の扉の鈴がリンと鳴る。この鈴の音は誰かが家の中に入った場合鳴るのだが、まずその前にこの豪邸は見えない結界で守られているためそもそもここに入ってこられるのは、此処にいる三人の少女か、あるいは羽島のどちらかだ。

そこで、3人の少女たちは、朝から相手をされなかったことの報いを与えるべくある悪戯を仕掛けることにした。



羽島はゆつくりと、出かけたときにでた疲れを癒すべく自室の布団に顔から突っ込む。

「ぶふあー…疲れた…僕はもう動かせません」

羽島はそのまま目を閉じ狐の状態で睡眠に入る。なぜ狐の状態かというと、狐の状態の方が体力をどうやら消費しにくいらしく、寝るにはこれが一番らしい。

そんな中、この部屋に危機が訪れる？とも知れずにいたずらのターゲット（羽島）はぐっすりと眠ってしまっている。

もちろん、悪戯を仕掛けるべく急接近中の少女3人は羽島が寝ていることになど、気付いてるはずもなく…

「彩花さん…本当に師匠にやるのですか…？」

気配を消しながら紫は彩花に問いかける。

「大丈夫です…羽島様にはたまにはこういうことをしないと気付いてもらえないので…」

その瞬間二人は心の中ではもった。

（何に気づくんですか…？）

そしてついに少女たちは羽島の部屋の前に到着する。

「私が開けるよー」

黒雪はそう言いゆっくりと慎重に羽島の部屋の扉を開ける。

そこに居たのは一匹の小さな狐だけ。だが、この狐の正体を3人の少女は知っている、知ってはいるのだが、大誤算なことに当の本人は寝てしまっている。

急に彩花が羽島（狐）の前に行き横で添い寝を始めた。

何事もなかったかのような行動に取り残された二人は私も負けずと羽島の周りを占拠してそのまま深夜まで一緒に寝たそう…。

第三十六話 「羽島はどうやらイベントに巻き込まれる そうです」

朝の鳥たちの鳴き声と共に羽島達の修行は始まった。

「はあ、はあ…流石羽島様です…私の攻撃などすぐに見破られましたか…」

今は彩花と羽島が道場の外の演習場にて模擬試合のようなものを行っていた。

状況的には、前半彩花が押していたのだが、後半になり彩花の策が尽きたのを見計らって羽島が一瞬の隙を突いたのだ。

「いやでも、もしあそこで彩花の新技だっけかな? 「空雪(そらゆき)」を使っていたら、僕は負けていたかもしれないね」

「申し訳ありません…私の考えはまだまだ未熟なようです」

—そんな時だった。

ドゴオン!!そんな轟音と共に結界の中に二つの妖力が迷い込んできた。

一つは小さいのだが、それを追うようにもう一つの中級の妖力を持った妖怪が確認できた。

それを感じ取っていたのは、どうやら羽島と彩花のみでなく、道場で集中力を高める鍛錬をしていた黒雪と紫も気づいたようで、慌てた様子で外へ出てきた。

「師匠!!結界の中に妖怪が…!」

「羽島様の庭に入るなど…塵芥ども…」

(おーい…彩花さん?怖いよ…)

「僕と彩花で様子を見てくるから、二人は此処の守護をお願いね」

「分かりました師匠!」

「分かった!」

羽島はすぐに妖力の感じる方へと転移術式を展開する。

「—彩花」

彩花の名を呼び手を伸ばす。彩花はそれを右手でとる。

二人は光の中へと消えていった。

羽島は、妖力を感じた付近の上空に転移し、上から妖力の正体を探った。

だが、案外発見は簡単で、クマのような姿をした中級妖怪が木々をなぎ倒しながら小さな妖力の何かを追いかけていたのだ。

「羽島様、アレは私が仕留めても？」

「あー、うんいいよ」

羽島が一言許可を出した途端、彩花は猛烈なスピードで中級妖怪に迫っていった。

中級妖怪はゆっくりと小さい妖力のもとに迫っていた…そんな時。

「そこの、塵芥(ちりあくた)…ここを誰の場所と心得てきたない足で踏み込んでいる…？」

中級妖怪は、彩花の言っていることが理解できるようで、片言の言葉で返事をする。

「オマエ…ダレダ…？」

だが、中級妖怪の眼は赤く今にも彩花を襲ってしまうのではないかというほど興奮していた。

「はあ…貴方のようなゴミに名乗る名は御座いませんので…どうか死んでください」

「オマエ、オレヲコケニシタ、ダカラクウ…ハラヘッタ」

中級妖怪はそれを一言に右手を振り上げ切りつけようとする。

「これだから、ゴミは困るんです…」

彩花が挑発すると中級妖怪の顔はみるみる噴火したかのような形相へと変わる。

「オマエ…!!ゼツタイクウ!!」

中級妖怪は次は両手を振り上げる。だが彩花はその瞬間―
「空雪」

二本の銀の雪のような刀が、空から降る雪のように不規則な動きをしながら、刃はゆっくりと中級妖怪のあちこちを切りつけていく。血しぶきが舞うが、彩花はそれを気にすることなく続ける。

その刃は直線を描くのではなく、不規則な曲線を描いたりしながら中級妖怪の中身を抉る。

それが終わるころには、もはや中級妖怪としての面影はなくしていた。た。

「―処理が大変だから」

そんな中、小さな妖力はその光景を見ながら草木に隠れて怯えていた…。

第三十七話 「羽島はまた、小さな女の子を保護したようです。」

羽島は、彩花が中級妖怪を倒したのを確認してからそつと小さな妖力の気配のする者の背後に回る。

「君は？」

そこに居たのは、紫より一回り小さい背中に黒い翼をはやした女の子が急に羽島に話しかけられ、怯えていた。

「あ、あう…!？」

羽島は女の子を怖がらせないようにと、笑みを浮かべてもう一度問いかける。

「君はどこから来たのかな？ 迷子？」

この言葉だけ聞くと、ある意味誘拐犯として捉えられそうだ。

「わ、私は…射命丸…文…、つか、鴉天狗一族で、す」

文は怯えながら、少しぎこちない受け答えをする。

「そう、か…彩花、この子は大丈夫だから僕が送っていくよ」

彩花は羽島の方を見て一礼をしてその場から退散した。

そして羽島は笑顔の顔を保ったまま、文に手を差し伸べる。

文は怯えながらも羽島の手をそつととる。

「いい子だね」

羽島は浮遊魔法を使い、空高くまで飛び上がる。

「わあ…」

普段体験することのない体験に、文は少女らしい笑顔を初めて羽島に見せる。

「えつとー、文が住んでいる場所ってわかる？」

「え、えつとー…あっちの方に里があり、ます」

羽島は文が指をさす方向へと右目の能力？を使って妖力が集中した里を探す。

「ちよつとまってねー…んーと、そこか…ちよつと掴まってね」

「え、あつきやあ!!」

羽島は妖力が密集しているところへと飛行する。

「人なのに飛べるんですか!？」

羽島は少し文の体を浮かせると変化の術を使うと羽島の体は煙に包まれる。

「これで分かったかな？」

文は自分がふわふわの何かの感触に捕らわれていることに気が付く。

「狐の妖怪なんですか？」

「まあ、そんな所かな…?」

その後も、羽島は文と他愛もない話をして、結局里の近くに着くまで一時間くらいかかった。

「んじゃあ、僕は此処で失礼するよ」

羽島はそつと文を背中から降ろすと文はどこか寂しそうな表情をして羽島を見る。

「また…会えますか？」

そんな文の言葉に羽島は優しく頭をなでながら答える。

「そうだね…君が、その時まで待っていてくれたなら、僕はまた君に会いに行くよ」

羽島はその言葉だけを残し、文の前から転移魔法で消える。



「羽島様、お帰りなさいませ」

羽島が家に戻ると玄関で彩花が和服を着て出迎えてくれたいた。

「うん、ただいま!」

羽島は今日最高の笑顔で返すと彩花の様子がおかしくなったのは、気のせいだろう。

「…!／／／」

明日も忙しくなりそうだ。そんな予感がしているのはきつと羽島だけののだろうか。

そんなことを思いながら、夕暮れに染まった空を見て溜息を吐くのだった。

第三十八話 「師匠と弟子と…」

紫が羽島の弟子になってから数百年が経とうとしていた。

「…師匠、私の話を聞いてはくれませんか？」

そんな月明かり照らされた外廊下を羽島が通りかかると、黄金に輝く髪が伸び、もう普通の男子ならば一発で惚れてしまうほどの美人になり果てた紫が、羽島の存在に気付くとそんな言葉をかける。

「どうしたのさ、紫？」

羽島はいつにもなく寂しそうな眼をしている紫の横にそつと座り込む。

「はい…最近になって私は思うようになったのです」

紫は満天の星空を見て溜息を吐く。

「何を思うようになったの？」

少し間が空いてから紫の口が開く。

「人間と妖怪は、本当に相いれない存在なのでしょうか？私には、どうしてもそうではない気がするのです…そう、根本的にこの世界の誰かが、妖怪を悪と決めつけ、人間を正義と…そう決めてしまっているだけなのかもしれないと…」

そんな紫の言葉に羽島は紫と同じように満天の星空を見つめ答える。

「そうだね、そうかもしれないね…その責任は、『過去の僕』にあるかもしれないし、これからの全ての者の責任かもしれない」

あえて羽島は過去に妖怪と人間に何があったのかを語らずに、濁りを残すような回答を流す。

「師匠は…誰なのですか？師匠は、どうして何もかも知っているように、この世界を語られるのですか？私の心は狭すぎます…故に分からないのです…師匠は、今までに何を見てきたのですか…？」

羽島はそつと立ち上がり紫の方を見る。

「それが分かった時に紫はどうするの？僕的には…もし、紫の求めている答えを僕が持っているとしたらそれは…『過去の僕』と『未来

の僕”を知ることになるね…それは、紫がもう少し大人になったら教えるよ」

羽島はゆっくりと体を自分の寝室の方へと向け歩き出す。



朝の鳥たちの声と共に羽島と彩花、黒雪は目を覚ます。

最初にみんなでいつも集まる食卓に着いたのは羽島だった。

ふと羽島は、テーブルの上にある置手紙に目が留まる。三つ折り手紙の表に書かれていたのは、「弟子からせんせいへ」と書かれた文字だった。

羽島は手紙をそつと開くと可笑しいぐらい笑いが込み上げてきた。

内容はこうだ。

「せんせい…私は昨晚、せんせいと話して確信しました。私はまだまだ未熟な存在だということに。ですが、私は一人で世界を見ることで知りたいのです。せんせいが教えてくれた世界は本当なのか、と。決してせんせいを疑うわけではありません。どうか許してください。あの時助けて下さったせんせいは…私にとつては太陽でした。私は今日から、先生が語る太陽の世界ではなく、先生が語らなかった月の世界を見てみたい。だからこそ、私は旅へ出ると決めました。彩花と黒雪にはよろしくと言っておいてください。わがままな私でしたが、私に生きることが教えてくださり、ありがとうございます！最高の師匠に育てられた弟子より」

羽島はそつとその手紙をテーブルの上に戻し外へと向かう。

外に出ると空は快晴で、風が心地よいぐらいに感じてしまう。

だが、羽島の眼は少し赤く透明な雫がぼとりと地面に落ちる。

「はあ…別れはいつでも惜しいものなんだね…」

第三十九話 「羽島は新たな旅にでるような？」

羽島は今現在、紫が一人で旅立ったということ彩花と黒雪に話しているところだ。

「と、いう訳なんだ」

二人は関しそうな顔で羽島の話を聞いている。

「そ、そうですか…なんだか寂しいですね…」

「紫とはもう会えないのー羽島様？」

「そうだね、また会えるよ、きつと」

そして羽島は、別の話へと切り替える。

「えつと、ここで皆さんにお話があります」

「話し、ですか？」

「そうそう、で、話つていうのはまた旅に出るよ、ということですよ」

すると、先ほどまで暗い表情をしていた二人は、少しうれしそうに表情へと変わる。

「旅ですか…久しぶりですね」

「私も旅に行くの？」

「もちろん！三人で “また” 旅をしよう！いろいろあつて結局僕が行きたかったところには行けなかったからね！」

さらに二人の少女の表情が明るくなる。

「出発は明日！で、どうかな？」

「私は問題はありません」

「私は大丈夫——！」

「それじゃあ明日に向けて準備だね！」



次の日の朝になり、本来なら旅に出るということで喜ぶべき門出の日のはずなのだが、なんと三人とも次の日が楽しみすぎて寝れていないのだ。

「お、おはようございます…羽島様」

「おはよう羽島様くふあくあ…」

「うん…二人ともおはよう…」

三人の眼にはくつきりと目の下にクマができていた。

「荷物とかは二人とも大丈夫？」

二人の少女は疲れた顔をしながらだるそうに頷く。

「羽島様…お屋敷は？」

「この家はまとめて持っていくよ？」

すると二人は口をそろえて。

「はい？」

普通に考えてそうだろう、そもそも屋敷を持ち歩いて旅をする人などいないだろう。だが、単純に考えて羽島は人ではないのだ。つまり、屋敷の一つや二つ、あるいはそれ以上の数の大きなものだって能力などを使って持ち歩くことはできるだろう。

「ちよつと待っててね」

羽島は彩花と黒雪に少し離れるように指示を出す。羽島達は、屋敷の外へと出ると羽島は屋敷の方へと向く。

「無限箱（むげんばこ）」

すると、屋敷を囲むように空間が歪み、その瞬間何事もなかったかのように消える。

「羽島様、いつの間にかこのような魔法を？」

「あ、魔力だつてこと分かっちゃった？」

これは、少し前のことだが屋敷を立てた頃に、羽島が彩花に妖力と魔力の違いについて教えていた時があったのだが、彩花は全くその違いを理解していなかったのだが、どうやら、魔力であるという認識ができるようにはなっていたらしい。

「んじゃあ行こうか？」

「はい！羽島様！」

「はい！羽島様！」

三人の旅人は一歩一歩力強く踏み出す。そんな三人の顔は、寝不足が嘘のように生き生きとしていた。

第四十話 「羽島の旅事情はいつも騒がしい？」

早朝鳴き始める鳥たちの声は、羽島達の一日の旅の始まりを祝福するかのよう。本日の天気は曇りのち雨…ああ、なんと悲しい天気か。空を見上げ溜息をつく羽島。そんな彼らの旅は今始まったのだ。

「羽島様、本日は何処まで？」

テントの片づけを終えた彩花がゆっくりと羽島に近づく。

「今日はあ…んー、行けるところまで行ってみようか？あいにくの天気だし、雨が降り出したら止むまでそこで雨宿り、待っても降り続けるようならそこで雨宿りだね」

「分かりました、黒雪にもそのように伝えておきます」

彩花は一礼すると食器の片づけをしている黒雪のもとへ行ってしまった。



羽島達は歩き始めて一時間で雨によって足止めを食らってしまった。現在は、近くにあった小さなお寺で雨宿りをしているところだった。彩花は、此処で寝泊まりすることを考えて食料調達をするということとで近くの山に行ってしまった。

「羽島様ー、この雨止むかなー？」

お寺の外廊下に座り、足元に溜まっている水たまりに足を入れて遊んでいる黒雪は、羽島に問いかける。

「うーん、これは止まないかもね…」

周りを見ると、雨の勢いが徐々に増してきていることが分かった。

「隣いいか？」

ふと、美少女と言ってもおかしくない少女が羽島の前に立っていた。

「どうぞ」

羽島は散らかっている荷物を片付ける。

「すごい雨だよなーいつ止むんだろう…」

「多分、これ止まないよ…？」

「うえ？本当か!？」

何という見た目とは裏腹の口調かと羽島と黒雪は内心驚いていた。

「そういうヤンタたちはどこから来たの？見た感じ旅人だよね？」

羽島達の荷物を見てなんとなく察したのだらう少女は羽島に問いかける。

「ああうん。そうだよ」

「そうなんだ！あたし「藤原 妹紅（ふじわら）の もこう」って言うんだ！よかつたらヤンタたちの旅の話聞かせてくれよ！」

そして羽島は、自分の名前と黒雪、彩花の紹介をし、どこを目指して旅をしているのかを話した。彩花は、羽島と黒雪が妹紅と話している間に帰ってきて、妹紅に挨拶だけをして、片手に持っていた鹿をテントを張り、調理し始めた。

「そういえば羽島たち凄い珍しいもの持つてるね？苗字持ちって事はどこかの貴族？」

「うーん、貴族…なのかな？」

羽島はこの時代の貴族に関してあまり詳しくはなかったので、はっきりとは答えずあえて誤魔化す感じで答える。

「ふーん、なんかはつきりしないなあ…まあ、苗字があるなら貴族なのは間違いないか…」

何とか誤魔化せたのか、妹紅は納得してくれた。

「羽島様、昼食の準備が整いました…妹紅さんもよければどうです？」
「お、いいの？なら、頂こうかな！」

羽島達が食事をしているときに一瞬雨は止んだのだが、そのあとすぐに大雨へと変わり、結局羽島と妹紅はその場で寝泊まりすることになった。